

# 障害者の読書

蔵書調査から見た読書環境と、墨字図書と比較した点字図書について

教育学部国語国文科 4年

1E15E011-8 伊藤美桜

## 目次

要約・・・・・・・・・・ 1

はじめに・・・・・・・・ 1

第 1 章 障害者の読書環境について・・・・・・・・ 2

1.1 障害者の読書についての先行研究まとめ・・・・・・・・ 2

1.2 点字図書館について・・・・・・・・ 7

1.2.1 法律の観点みる点字図書館・・・・・・・・ 8

1.2.2 実際の業務の観点からみる点字図書館・・・・・・・・ 9

第 2 章 点字図書館の蔵書状況について・・・・・・・・ 10

2.1 図書館の蔵書についての先行研究まとめ・・・・・・・・ 11

2.2 栃木市立図書館とサピエ図書館の蔵書調査・・・・・・・・ 15

2.2.1 調査方法・・・・・・・・ 15

2.2.2 調査結果・考察・・・・・・・・ 17

第 3 章 『羅生門』による墨字図書と点訳図書の比較・・・・・・・・ 20

3.1 点字について・・・・・・・・ 20

3.1.1 点字の特徴・・・・・・・・ 20

3.1.2 点字における漢字の障害・・・・・・・・ 22

3.2 『羅生門』比較・・・・・・・・ 23

3.2.1 点訳と漢字の関係について・・・・・・・・ 24

3.2.1.1 漢字の使用と意味の理解について・・・・・・・・ 24

3.2.1.2 漢字の意図的な使用について・・・・・・・・ 26

3.2.1.3 点訳と漢字についてのまとめ・・・・・・・・ 27

3.2.2 点訳と読点の関係について・・・・・・・・ 28

3.2.2.1 読点の効果について・・・・・・・・ 28

3.2.2.2 読点の意味と点訳・・・・・・・・ 30

3.3 墨字図書の点訳についてのまとめ	44
おわりに	44
資料 1 サピエ図書と栃木市立図書館の蔵書状況	46
資料 2 点訳版『羅生門』	93
資料 3 読売新聞の「にきび」の種別	105
資料 4 『羅生門』読点の位置と分類について	107
参考文献	124

## 要約

本論文では障害者の読書について議論する。第1章では障害者の読書環境について先行研究などを参考にしながら明らかにしていく。第2章では点字図書館の学術書の蔵書状況についてチェックリスト法を用いて、調査する。第3章では『羅生門』の墨字版と点訳版を比較し、点訳をすることで変化が現れるのかを検討する。

## はじめに

私は今まで読書の環境について不満を持ったことがなかった。それは書店、近所の図書館、大学図書館などを自由に使えていたからだ。しかしこのような満足のいく読書環境を手に入れられていたのは、偶然私が特に大きな障害を持たず、生活をしていただけだった。このことに気づいたきっかけは、私が教育ボランティアしていた時に、ディスレクシアの特徴を持った生徒に出会ったことだ。その生徒は教科書の文章を読むことが苦手で、本を読むことも嫌いだと言っていた。しかしそのような生徒でも音読の機能が備わったものを使うことができれば、そのような苦手意識を持たずに読書を楽しむことができるだろう。このような経験をきっかけに、障害を持つ方々がどのような読書環境にあるのかを調査しようと思った。

なお、本論文では様々な障害（視覚障害、聴覚障害、知的障害、発達障害、肢体不自由等）を持つ方々の総称として「障害者」という言葉を使っている。

## 第 1 章 障害者の読書環境について

### 1.1 障害者の読書についての先行研究まとめ

障害者の読書環境を調べる上で、まずどのような研究がされているのか実態を調査する。なるべく最新の研究を取り上げることし、2014年から2017年に発表された論文とその他単行本としてまとめられたものを参考にすることにした。この条件で障害者と図書館利用について書かれたもので読んだものは14本の論文と3冊の著作だ。まず14本の論文を分類する。

- 1、障害者の図書館利用における合理的配慮について書いているもの
- 2、個々の図書館の取組を紹介しているもの
- 3、障害者が図書館を利用するにあたり、使用するものを紹介しているもの

これらの3つには大きく分けることができるようだった。ここから実際の論文を紹介しながらどのような内容であるかをまとめていく。

まず1の障害者の図書館利用における合理的配慮について書いているものは、

- 太田順子「障害者の権利に関する条約」批准と今後の図書館サービス：障害当事者が参加する図書館サービスに向けて」(『図書館雑誌』108(8)、2014年8月)
- 井上芳郎「障害者差別解消法と図書館(3)図書館に求められる「合理的配慮」：LD(学習障害)の人たちへの対応」(『図書館雑誌』109(12)、2015年12月)
- 河村宏「障害者差別解消法と図書館(1)図書館における合理的配慮：障害者差別解消法施行に向けて」(『図書館雑誌』109(10)、2015年

10月)

- 南亮一「障害者サービスと著作権について：これまでの経緯と個々のサービスとの関係を中心に」(『専門図書館』281、2017年1月)
- 佐藤聖一「図書館の障害者サービス(図書館利用に障害がある人へのサービス)」(『専門図書館』283、2017年5月)
- 新山順子「日本図書館協会障害者サービス委員会の活動」(『専門図書館』283、2017年5月)

これらは国際的な条約や日本の法律の視点から、障害者の図書館利用についてまとめている。これらで重要視しているのはどのように「合理的配慮」と「基礎的環境整備」を図っていくかについてだ。

障害者の権利に関する条約(略称：障害者権利条約)が2006年12月に国連総会において採択され、2008年5月3日に発行された。日本はこの障害者権利条約を批准に向けて、障害者に対する法律を新たに制定したり、改正したりと国内法の整備を進めた。これらの法律が整備される以前から各図書館では障害者サービスを行っていたが、これらにより、図書館のサービスについて改められるきっかけとなった。

上記の論文で分かったこととして、障害者の図書館利用については様々な条約や法律が関係していて、法への理解が必要ということだ。また、これらの論文は、障害者の図書館利用の実態について知らない人に周知するために書かれたものが多いようだった。そのため、現在行われているサービスの紹介は書かれているものの、具体的にこれからどのようなサービスをすべきなのかがあいまいなものが多い。そして、同じような論の展開がなされているので、条約などの説明から一歩進んだ、それらを活用した図書館利用について考えていく必要がある。

次に 2 の個々の図書館の取組を紹介しているものは

- 松原洋子「大学図書館における障害者サービス」(『図書館雑誌』110 (7)、2016年7月)
- 松戸宏予「視覚化した支援と提携ー特別なニーズをもつ児童生徒の個々のニーズを把握してー」(『図書館雑誌』109 (11)、2015年11月)
- 杉山雅章「視覚障害者のための図書館「日本点字図書」の事業について」(『専門図書館』283、2017年5月)
- 小野康二「熊本県聴覚障害者情報提供センターの取り組みについて」(『専門図書館』283、2017年5月)
- 田中克明「認知症にやさしい図書館プロジェクトー誰もが安心して暮らせる地域づくりー」(『図書館雑誌』110 (7)、2016年7月)

これらの論文では、最初に挙げた論文で書かれていた合理的配慮の具体的な取り組みについて述べている。新たな資料の作成、図書館の館内案内を分かりやすくすること、視覚障害者が自ら情報を入手し、発信できるように IT 教室を開くこと、点字教室を開く事など様々な取り組みが紹介されている。これらはまだ障害者サービスが整っていない図書館へ向けて、先進的な取り組みをしている図書館の方法を紹介するといった論文だった。利用者の使用状況についても述べられているので、今後の改善点についても分かりやすい。また、公共図書館で働く視覚障害職員の会『見えない・見えにくい人も「読める」図書館』(読書工房、2009年11月)でも具体的な取り組みが分かりやすく紹介されていた。この本の著者は視覚障害者であり、図書館員でもあるため、どのようにすればより良いサービスとなるかを両者の視点からも書かれている。

これらの論文で分かったことは、障害者サービスの内容だけでなく、

これらのサービスがどのように利用され、使い心地についてはどうなのかといった視点を持たなければならないということだ。実際の利用者の声を取り入れた論文であることが望ましい。

最後に3の障害者が図書館を利用するにあたり、使用するものを紹介しているものについて書かれているものだ。

- 石井みどり「障害者差別解消法と図書館(2)すべての子どもたちに、読書の喜びを：媒体の変換で読める本作り」(『図書館雑誌』109(11)、2015年11月)
- 野村美佐子「DAISYを活用した障害者サービスの推進：日本障害者リハビリテーション協会の取組みを通して」(『専門図書館』283、2017年5月)
- 木原正雄ほか「障害者の方も読書しやすい環境：用品、施設からサポート」(『専門図書館』283、2017年5月)

これらの論文では障害者たちが利用する図書や、読書するときを使う道具について述べている。点字図書についてよりも最近ではDAISY図書<sup>1</sup>についての研究が盛んであるようだった。これは視覚障害者だけではなく

---

<sup>1</sup> DAISYとは「Digital Accessible Information System」の頭文字をとったもので誰もが使えるアクセシブルなデジタル資料のことで、音声DAISY、テキストDAISY、マルチメディアDAISYがある。国際標準規格になっている。もともとは視覚障害者のために開発されたが、音声読み上げや文字の拡大、ハイライト表示、地と文字の白黒反転などの機能があるため、学習障害者や知的障害者にも有効なものとなっている。

く、聴覚障害者、学習障害者、知的障害者、その他紙媒体に印刷された文字の読みに困難のある人々も利用しやすい図書であるためのようだった。また、図書だけでなく支援機器として、リーディングトラッカーという読む箇所をだけに注目が行くように工夫された読書補助具について書かれているものもあった。これらの支援機器は図書館が作成しているものもあれば、企業が販売しているものもあるのが分かった。

これらの論文からは DAISY 図書が比較的新しい、多くの障害者にとっての便利なツールになるのものであるということが分かった。まだ DAISY 図書自体が新しいものなので、障害者の図書館利用についての論文の中では、まだ研究の余地があるということ、最新の研究がそろっているということが分かった。

これらの大きく 3 つに分類される論文から分かることは、障害者サービスについては法律の整備が進められたり、障害者にとって本を読みやすくするための支援機器の開発はされていたりするが、それらを使う利用者の声あまり分からないということだ。サービスをよりよくするためには利用者とそれを提供する人たちの相互の協力がなければならないが、そこへの関心が少し薄いように感じた。確かに聞き取り調査等は時間がかかり困難だ。しかし障害を持つ方々で、さらに図書館を利用している方・利用していない方に図書館の印象を聞くことができれば、今の図書館がどのような実態か、何を改善すべきかが分かる。今後の研究で条約や法律、設備、DAISY 図書などのツールがどれだけ障害を持っている方々に使われているのか・使われていないのかを調査することで、よりよい読書環境を作り出すことができる。

また、今回私が読んだ論文は障害者権利条約などを受けて発表された

もので、かなり最近の図書館の動向について書かれていた。参考文献で挙げたものの中では、障害者サービスの歴史についても書かれていたが、その点についてもう少し研究すると、そのサービスの変化から、今までの障害者の図書館利用の実態について読み取ることができるかもしれない。

これらのことから今後の研究の方針として歴史からとできれば聞き取り調査から図書館利用について考えることが挙げられる。

## 1.2 点字図書館について

障害者の読書の環境について重要な役割を担っているのが、各地にある点字図書館だ。点字図書館では点字図書のほかにも録音図書<sup>2</sup>、DAISY図書など様々な形態の図書があり、視覚障害<sup>3</sup>だけでなく、聴覚障害、肢

---

<sup>2</sup> 日本では、1950年代にオープンリールを使った録音資料作りが始まり、次第にカセットテープでの録音が主流となった。録音資料では図書に書かれている文字だけではなく、挿絵や写真、図表についても音声で説明されている。現在では音声 DAISY に変換されているが、カセットテープのままになっているものは、テープレコーダーが減少しているため早めの変換が求められている。

<sup>3</sup> 「平成 18 年身体障害児・者実態調査結果」によると、視覚障害者の回答者 379 名に対して点字ができると答えたのは 48 名で全体の 12.7% だった。そして点字ができないが点字を必要としているものは 6.6% いた。このことから視覚障害者だからと言って、誰もが点字資料で情報を得ることができるとは限らないということが分かる。

体不自由、知的障害など様々な障害を持つ方々に読みやすい図書がある。そこで、点字図書館の機能や役割について法律の観点と業務の観点から述べる。

### 1.2.1 法律の観点からみる点字図書館

点字図書館は主に点字図書や録音図書の貸し出し・配信サービスをしたり点訳・音訳などをしたりする図書館だ。しかし図書館という名前がついているものの、点字図書館は図書館法に基づく図書館ではなく、身体障害者福祉法に基づき設置された社会参加支援施設の一つ（視聴覚障害者情報提供施設）で、所轄庁は厚生労働省となっている。

具体的にこの法律を見ると「（視聴覚障害者情報提供施設）第三十四条 視聴覚障害者情報提供施設は、無料又は低額な料金で、点字刊行物、視覚障害者用の録音物、聴覚障害者用の録画物その他各種情報を記録した物であつて専ら視聴覚障害者が利用するものを製作し、若しくはこれらを視聴覚障害者の利用に供し、又は点訳（文字を点字に訳すことをいう。）若しくは手話通訳等を行う者の養成若しくは派遣その他の厚生労働省令で定める便宜を供与する施設とする。」とあり、ここで書かれている施設が、点字図書館として運営されている。法律上では視聴覚障害者向けの施設だが、最近では DAISY 資料を扱っている施設もあり、これは視聴覚障害者だけでなく、学習障害者や知的障害者にも有効な資料だ。このことから分かるようにこの法律だけでは点字図書館が実際に情報提供をしている利用者をとらえきれていない。また今では DAISY 資料をはじめとする様々な資料に訳されるが、それらが反映されていない点においてもこの法律には不足がある。「点字図書館」という項目を新たに作り、規定することが必要だ。

また、図書館法では図書館について「図書、記録その他必要な資料を

収集し、整理し、保存して、一般公衆の利用に供し、その教養、調査研究、レクリエーション等に資することを目的とする施設で、地方公共団体、日本赤十字社又は民法（明治二十九年法律第八十九号）第三十四条の法人が設置するもの（学校に附属する図書館又は図書室を除く。）」としている。業務内容としては点字図書館も同じことをしているが、点字図書館が厚生労働省の管轄にあるため、この中には入っていないという現状だ。

二つの法令を比べると、点字図書館（視聴覚障害者情報提供施設）では誰を対象としたどのような形態の資料を扱うということは分かるが、どのような目的・内容の資料を取り扱うかということが図書館法の「図書館」よりも不明確だ。この点から考えても点字図書館についての新しい法令は必要と考えられる。

### 1.2.2 実際の業務の観点からみる点字図書館

点字図書館と呼ばれるところでは図書の貸出や配信サービスが主な業務ではあるが、そのほかにもボランティアの協力をもとにした図書の製作、プライベートサービスとして希望点訳や個人朗読、またボランティアの育成など多岐にわたる。

実際に、日本点字図書館<sup>4</sup>に見学に行った結果、一般的な図書館と大き

---

<sup>4</sup> 日本点字図書館は本間一夫により 1940 年に日本盲人図書館として設立され、現在では身体障害者福祉法に基づき設置された身体障害者社会参加支援施設の一つとなっている。点字図書、DAISY 図書等をボランティアの支援を受けながら、年間約 1400 タイトル製作している。蔵書数は約 21,200 タイトル。

く異なる点として、図書館は閉架式で、利用者は図書館に直接本を借りに来る方もいるが、多くは郵送での貸し出しとなっていることだ。そのため利用者の姿はほとんどなく、代わりに音訳ボランティアの方々が録音図書を作るために来ている様子が見られた。このようなボランティアの管理することも点字図書館の業務としてある。

点字図書館の業務の中でボランティアの存在は大きい。しかし、水谷氏はボランティアの現状について「資料作成について、必要なパソコンなどの機材や交通費までボランティアに負担させている」(2)と問題を指摘している。

## 第2章 点字図書館の蔵書状況について

障害者の読書生活について調べるに当たり、まずどのような本が点字図書館にあるのかという点が気になった。そこで点字図書館の蔵書状況を調べるためにどのような方法があるのかを先行研究を参考にし、検討していく。

まず、点字図書館の蔵書状況について、どのような文献があるのかを調査している先行研究を見つけることができなかった。ほとんどの場合、ある特定の点字図書館にどの資料種（点字、カセットテープ、DAISYなど）が何点あるかということを書いている程度だった。

しかし、数としての明示はないが、田中氏は「…（点字図書館の図書の）ほとんどは、小説や随筆など、娯楽性の高い図書である。大学生や研究者、専門的な職種に従事する人などが必要とする専門書、学術書は非常に少ない」(3)と学術書の少なさについて指摘している。また渡辺氏

らの調査(4)では、プライベート点訳・音訳サービス<sup>5</sup>の利用者は、点訳・音訳ともに専門書を依頼することが多いという結果を出している。

これらのことから特に点字図書館の学術書の蔵書状況が分かるような調査が必要と考えられる。そこで、一般の図書館の蔵書状況についての研究を参考にし、今回の調査に合った方法を取り入れることにする。

## 2.1 図書館の蔵書についての先行研究まとめ

実際の調査にあたり、どの方法をとることが点字図書館の蔵書状況を分かりやすくまとめることができるか、先行研究から考える。今回は一般の図書館の蔵書状況を調べた3つの論文からその調査方法を学ぶ。

①大場博幸、安形輝、池内淳、大谷康晴「図書館はどのような本を所蔵しているか：2006年上半期総刊行書籍を対象とした包括的所蔵調査」(『日本図書館情報学会誌』58(3), 139-154, 2012年)

### 概要

日本の公共図書館・大学図書館・国立国会図書館の所蔵の傾向について、2006年の上半期に刊行された書籍を対象とし、所蔵館数についての調査をした研究報告。

### 調査方法

図書館の蔵書検索サイトを用いて、上記の期間に刊行されたもので、書誌事項を確認することができた35,070の書籍の所蔵と所蔵館数について調べている。この際、「Cコード」<sup>6</sup>を使うことで、属性別の所蔵の

---

<sup>5</sup> 点字図書館に蔵書がないものについて、希望した図書の点訳や音訳を依頼できるサービス

<sup>6</sup> 出版社が書籍に付与する4桁の数字で、販売対象・発行形態・分類を示したもの

分布も明らかにしている。さらに「話題度」として検索エンジン Bing の ISBN のヒット件数をもとにその書籍に対する一般の人々の需要を表そうとし、図書館の需要に対する蔵書について明らかにしようとしている。

## 結果

1 つ目に、所蔵館数を調べたものなので、複本による需要への対応をしている可能性があるとしても、話題度に近い分布を示す館種はなく、需要に敏感に対応していることを示す所蔵傾向は示していないということだった。2 つ目は、国立国会図書館は網羅的に蔵書しているものの、いくつかのカテゴリでは十分ではないこと。3 つ目に大学図書館は専門書や高価な書籍、ページの多い書籍を選択的に収集していること。4 つ目に公共図書館はおおむね出版点数に沿った収集傾向を示していることだ。

②後藤久夫「チェックリスト法による大学図書館における蔵書評価の一例—東京都立大学附属図書館における初学者向けの図書の収集状況—」  
（『大学図書館研究』（57）, 39-42, 1999 年 12 月）

## 概要

チェックリスト法を用いて都立大学附属図書館の蔵書傾向について調査した研究報告。

## 調査方法

チェックリスト法は「権威ある機関等が策定したある種のリストや標準的な書誌、代表的な図書館の目録と照合し、蔵書の質的評価をするもの」であり、この方法を使って調査している。大学図書館の推薦リストがなかったため、筆者は朝日新聞社の『AERA MOOK』をリストとして

用いている。この本はあらゆる領域の入門書を平均 50 冊程度紹介している。そしてこのリストをもとに OPAC を利用し検索をして、カバー率を調査している。

## 結果

掲載点数 833 点に対し、付属図書館の所蔵は 484 点、58.1% だった。特に動物学・気象学などの理学系や人文学部の中でも後発の学科である社会福祉学や心理学などの所蔵率が低かった。一方、社会学や経済、政治といった分野は約 70% 台の所蔵率だった。学部・学科の図書室の蔵書を入れると、蔵書数は 601 点で、72.1% だった。

③ 鈴木守「大学図書館における蔵書評価に関する事例研究－教育分野の図書の所蔵状況について－」（『常葉大学教育学部紀要』（36）,1-18, 2016 年 3 月）

## 概要

チェックリスト法を用いて T 大学図書館の教育分野の図書の蔵書構成について調査した研究報告。

## 調査方法

国立国会図書館の全国書誌に収録される図書のうち、教育分野に分類されるに日本語の図書のリストを作成し、それを用いてチェックリスト法で蔵書について調べている。文献リストの図書は 2010 年から 2015 年の 5 年間に出版された日本語の図書のうち、国立国会図書館分類法の「F 教育」に分類されるものとしている。

## 結果

T 大学図書館では就学前教育、特別教育、英語教育等の同大学の設置する教育学部や教員養成課程の研究に関わる分野の反映は見られたもの

の、同大学が擁する生涯学習の内容に関係するだろう分野の所蔵タイトルが少ないという課題が見つかった。

これらの先行研究の調査方法には、長所や短所について以下の点が考えられる。①の大場氏らの調査方法では C コードを利用しているため、専門書に絞り込めばその蔵書状況は捉えることができそうだ。しかし点訳・音訳などの特徴として、点訳などを始めてから半年から 1 年ほど時間がかかり、特に専門書は知識が必要なために時間がかかることが多いことから、どの年代を対象にすべきかを決めづらい。また、専門書等は古典的な文献も価値があることが多いので、近年に刊行されたものの網羅性だけを調べることで蔵書状況を評価できるかに疑問が残る。

②、③についてはチェックリスト法を用いた蔵書評価をしている。②では大学図書館の学術書の蔵書状況を『AERA MOOK』を用いたチェックリスト法により評価している。分野ごとの学術書の蔵書状況が分かるので、どの分野が多く、どの分野が少ないかを知ることができる。一方で、この『AERA MOOK』はその分野の専門家の一人または数人といった少ない選者による推薦図書を掲載しているものなので、偏りが無いとは言えない。

③では国会図書館の全国書誌から教育分野の図書リストを作成し、それを使用したチェックリスト法を行っている。書誌情報があるものについてすべてを対象としているので、その分野におけるカバー率は分かりやすい。しかし教育分野に限っても 11,245 タイトルととても膨大な量の調査が必要となるため、時間の関係上できないと考えられる。

これらの調査方法には、どれをとっても長所・短所があるが、今回の点字図書館の学術書の蔵書状況を調べるための方法としては、様々な分

野の学術書が調べられる点や時間的に可能である点から、②をもとにした調査方法が適していると考えた。

## 2.2 栃木市立図書館とサピエ図書館の蔵書調査

### 2.2.1 調査方法

本研究では、点字図書館の学術書の蔵書状況を調べるための方法としてチェックリスト法を採用した。図書館の蔵書と照合するための文献リストとして、『学問がわかる 500 冊』(5)に掲載されている本をリスト化し、使用した。『学問がわかる 500 冊』では 10 分野（哲学、経済学、社会学、国際関係学、法律学、社会福祉学、宗教学、教育学、心理学、政治学）で 50 冊ずつを紹介しており、分野別の蔵書状況を調べることができる。またこのリストで紹介されているものは 2000 年までに発行された本を対象としているため、点訳などをする過程で生じてしまう時間のずれを現時点（2018 年）からならそれほど気にしなくてもよい。短所として推薦図書の偏りがあるかもしれないという点は、一般の図書館の蔵書状況も同じリストで調べ比較することで、偏りがあっても点字図書館の特徴を捉えられると考えたため、このリストを使用することにした。

まずリスト化したものの蔵書状況を調べるために、点字図書館の蔵書状況はサピエ図書館<sup>7</sup>の検索サービス(6)を利用し、調査した。このサピエ図書館は実際に建物を備える図書館ではない。一つの点字図書館に絞って調査しなかった理由は、点字図書館の規模と翻訳に関することがあ

---

<sup>7</sup> 全国の視覚障害者情報提供施設などで製作された点字資料や録音資料のデータや書誌情報がアップロードされているネットワーク。全国規模で情報の共有がされている。

るからだ。まず規模についてだが、それぞれの点字図書館の規模には大きな差があり、対象にする図書館を決めることが難しいためだ。以下に挙げるものは、ホームページ等に蔵書数の記載があった点字図書館の蔵書数をリスト化したものだ。ホームページにこのような蔵書の記載をするところは比較的大きな点字図書館が多い。それでもそれぞれの資料を合わせて4万タイトルであるため、小さな規模のところはそれほど充実していないことが分かる。

名称	点字図書	テープ図書	デージー図書	CD図書
社会福祉法人ほくてん 北海点字図書館	3774	2571		4669
山形県立点字図書館	7234	5537	4362	
福島県点字図書館	9302	5002	6205	
日本点字図書館	21084	17374		
東京ヘレン・ケラー協会 点字図書館	2689	1029	4899	
社会福祉法人 日本盲人会連合	6047	4592	3957	
声の図書室	1608	4161		4903
ひかり文庫	1874	1768	3257	
点字図書館「明生会館」	4911	7311		4782
山口県盲人福祉協会点字図書館	4470	7061		3648
山口県点字図書館	3000	2100	3400	
高知点字図書館	8811	15585		
視聴覚障がい者情報センター	3548	4058	4872	
宮城県視覚障害者情報センター	12925	14040	7843	
静岡県点字図書館	6054	11718	5453	
大阪市立早川福祉会館点字図書室	1448	5181	3990	
広島県立視覚障害者情報センター	11178	11883		66
北九州市立点字図書館	3435	3760		4276

翻訳に関することとは、サピエ図書館に登録されているものは、サピエの会員であれば地元の点字図書館になくとも取り寄せることができる。そのため1度どこかで翻訳されたものは、多く貸出されるものでなければ、基本的には作らない。ある図書館に蔵書がなくとも利用することができる仕組みなので、どこかの点字図書館に絞らずに調査した方が、正

確なカバー率を調べることができるからだ。

調査をした結果、様々な資料種（点字、カセットテープ、DAISY）があったため、その別についても記すことにした。

比較対象の一般の図書館は、サピエ図書館の書誌情報が約 66 万件であったことから、それに近い蔵書数である栃木市立図書館（全 6 館）の蔵書、約 66 万 5 千冊から調べることにした。なお、栃木市立図書館の蔵書検索システム(7)を利用して蔵書状況を把握した。

リストにある本で、翻訳者や出版社が異なる同一内容のものがあつた場合も蔵書ありとして考えた。

#### 2.2.2 調査結果・考察

詳細な結果は別紙（資料 1）にて記載するが、それらを分析したものを記す。

	サピエ図書 館	割合①	栃木市立図 書館	割合②	② - ①
哲学	22/50	44%	26/50	52%	8
経済学	13/50	26%	20/50	40%	14
社会学	17/50	34%	23/50	46%	12
国際関係 学	15/50	30%	16/50	32%	2
法律学	18/50	36%	21/50	42%	6
社会福祉 学	14/50	28%	12/50	24%	-4

宗教学	12/50	24%	12/50	24%	0
教育学	11/50	22%	13/50	26%	4
心理学	6/50	12%	15/50	30%	18
政治学	22/50	44%	26/50	52%	8
全体	150/500	30%	184/500	36.8%	6.8

※割合①はサピエ図書館のリストのカバー率について、割合②は栃木市立図書館のリストのカバー率について表している。

※サピエ図書館の蔵書については資料種が異なるものも含めているが、タイトル数でカウントしている。

全体として栃木市立図書館のカバー率としては高いことが分かったが、先行研究で述べられていたほど点字図書館に学術書が少ないということはない。しかしこれはまずサピエ図書館で全国の蔵書状況と、ある市立図書館との結果なのでそもそもの蔵書数が点字図書館全体を含めてもまだまだ少ないということは分かる。そして今回のリストで用いた『学問がわかる 500 冊』は初学者向けの推薦図書なので、先行研究で述べられていたこととは少し結果が異なったのかもしれない。

分野別にみていくと、サピエ図書館の蔵書でカバー率が高いのは哲学、政治学であり、これらは栃木市立図書館のカバー率と比べてみてもそれほど大きな差はない。またカバー率としては低いですが、栃木市立図書館とカバー率の差が小さいのは宗教学や教育学の分野だった。そしてカバー率の差でみると最も大きかったのは心理学だった。唯一、サピエ図書館の蔵書の方が多かったのは社会福祉学だった。社会福祉学の分野で、栃木市立図書館しかないものは高齢者の問題を取り扱ったものがあるが、

反対にサピエ図書館にしかないものは障害者福祉について取り扱ったものがある。これは点字図書館の利用者と一般の図書館の利用者の違いによって蔵書が異なると考えられる。

次に資料種別の結果を見ていく。

	サピエ図書館 タイトル数	点字	カセットテ ープ	DAISY
哲学	22	13	6	14
経済学	13	5	4	7
社会学	17	8	0	13
国際関係学	15	7	6	2
法律学	18	10	6	8
社会福祉学	14	9	10	5
宗教学	12	9	4	6
教育学	11	7	5	4
心理学	6	2	3	2
政治学	22	13	12	10
全体	150	83	56	71

サピエ図書館に蔵書があったものの中で、点字資料（点字データ）、カセットテープの録音資料、DAISY資料の3種類があった。タイトル数とそれぞれの資料種の合計が合わないのは、同じタイトルでも複数の資

料種に翻訳されていることがあるからだ。例えば哲学分野のカントの『永遠平和のために』は点字・カセットテープ・DAISYのすべての資料種に翻訳されている。

今回の結果からは、全体としては点字資料が最もカバー率が高いということが分かった。これは、点字図書館の成り立ちとして視覚障害者のための図書館として発足したことが挙げられる。今までで最も点訳に自館をかけていたことが、蔵書数が多くなった理由として考えられる。そしてカセットテープの資料が最も少なかった。ただし分野によってはカセットテープが多かったり、DAISYが多かったりと様々なので音声への翻訳が向いているものと点訳する方が向いているものがあるのかもしれない。また DAISY 資料は比較的新しい資料なので、今回は点字資料よりも少なかったが、今後増えていくと考えられる。

今回の調査では蔵書状況のみで、どの分野がなぜ多いのか、少ないのかまでは分からなかった。それぞれの資料種の特徴や、翻訳される原本の内容や図表などの取り扱いなどについて調べることで、何か手掛かりを見つけることができるかもしれない。

### 第3章 『羅生門』による墨字図書と点訳図書の比較

第2章では実際の点字図書館の蔵書状況について調べたが、その点訳や音訳などされたものが、原本と同じように伝えられているかという点は分からない。そこで今回は、比較的短い芥川龍之介の『羅生門』で点訳したものが原本と変わらずその内容を伝えられているのかを調べることにした。

#### 3.1 点字について

### 3.1.1 点字の特徴

具体的に『羅生門』を使って比較する前に、点字の特徴をおさえる。点字は墨字<sup>8</sup>と比べて文字という面で以下の特徴がある(8)。

- ① 墨字は点や線でできているが、点字は6点の組み合わせによってできている。
- ② 墨字は目で読んで意味を読み取るが、点字は触ることで意味を読み取る。そのため墨字の場合は一遍に複数の文字を読み取れるが、点字の場合は一文字ずつ触った場所を読み取ることになる。
- ③ 墨字は縦書き・横書きとも可能だが、点字は左から右への横書きのみ。
- ④ 墨字は文字の大きさや字体、色などを変えて表記することができるが、点字は文字の大きさ、形は一定。
- ⑤ 墨字は漢字仮名交じり体系だが、点字は仮名文字体系<sup>9</sup>。点字は分かち書きをすることで意味をとりやすくしている。

このような特徴を持つ点字で、点訳の際に関わるのは主に⑤の漢字が使われないということだ。仮名文字体系とあるが、それも表音的なかな文字体系になり、助詞の「は」「へ」などは「わ」「え」と表される(「を」については変わらない)。このような特徴も点訳をする上で重要になる。

また、今回の調査で私は、実際に点字図書を読みながら点字を学んだが、規則性があるため、目で見てその点字が何を表すかは比較的容易に

---

<sup>8</sup> 点字に対して印刷されたり書かれたりした文字

<sup>9</sup> 点字には「漢字点」や「六点漢字」など漢字を表す点字も考案されているが、日本における点字表記法の唯一の決定機関である日本点字委員会は仮名文字体系を採用している。

判断できる。しかし触感で判断することはできなかった。

これらの特徴を踏まえた上で、『羅生門』の墨字図書と点訳図書の比較をする。

### 3.1.2 点字における漢字の障害

現在、墨字の文章はほとんどが漢字かな交じりで表されている。しかし、点字を使用するとそれらは表音的に表される（漢字点など漢字を表す点字もあるが、一般的ではない）。次の節で『羅生門』本文を用いて点訳されたものにおける漢字の効果について考えていくが、その前に日本語を表記するうえでの、障害者にとっての漢字について述べた先行研究を参考にしながら、漢字について考えていく。

あべ氏は現在の日本では「漢字が権威化」していることを指摘し、漢字が障害として機能していることについて考えられていないことを批判している（9）。漢字の権威化について、「漢字かなまじり文がはやくよめるという主張」や「漢字のわかりやすさ」について述べているものに、科学的根拠が明確でないことを指摘したり、「同音異義語」の問題については言い換えることで漢字を使わなくても理解できるようになることを主張したりしている。そしてあべ氏は視覚障害者（弱視者を含む）やディスレクシアの特性を持つ人々、日本語を母語としない人々などが、漢字によって負担を強いられている現状について述べている（10）。

また、ましこ氏は自身の論文で漢字を使わず、表音的なかな遣いで、漢字を用いない書き言葉についての考えを3つの論文にわたって述べている（11）。これらの論文はひらがな・カタカナによって構成されているため、一見読みづらいように思える。しかし、分かち書きを採用したり、漢字で表記される熟語をカタカナで、それ以外はひらがなで表した

りすることで、読んでいるうちに、漢字かなまじり文の慣れによって読みづらく感じるだけで、漢字がなくともその内容は理解できるということが分かる。

これらの論では、漢字によって書き言葉を理解しづらいと感じている人がいることが述べられ、それらの解消するために新しい書き言葉の提案（必ずしも漢字を廃止することではない）がされている。確かに漢字によって不都合が起きることもあることは分かった。しかしこれらの論文では、日常生活を送るうえで使われる漢字について中心に捉えられており、漢字が文学作品においてどのように機能しているか・していないのかについてはさほど考えられていない。たとえば黒田夏子『ab さんご』はひらがなを多く使って書かれた作品だ。「漢字を使わない」ということにも意味があるのならば、漢字を使うことにも文学作品には何かしらの意味を持ち得るだろう。

このような点も踏まえながら次の節で点訳図書について考える。

### 3.2 『羅生門』比較

今回点字版の『羅生門』として使用したのは、日本点字図書館に所蔵されていた『羅生門・鼻』（新潮文庫 1985年）の点訳版<sup>10</sup>だ。『羅生門』の点訳したものを、もう一度文字に書き起こしてから比較を行うことにした。それにあたり、文字に起こしたものは便宜上、ひらがなにした。また、『羅生門』本文の引用は読みやすさを重視して旧字体を新字体に改め、仮名遣いは点字図書と合わせるために、現代仮名遣いにしてい

---

<sup>10</sup> 日本点字図書館は視覚に障害のある方や、活字を読むことが困難な方を対象としてサービスを行っているため、基本的には障害のない人は利用できない。今回は卒論のために協力して頂いた。

る。

実際に点訳されたものをもう一度、墨字でできる限り点訳されたとおりに表してみる(資料 2)と、『羅生門』では墨字のものと点字のものでは、大きく分けて 3 つの違いがある。

1 点字版には漢字が全く使われていない。

2 点字版には文字の種類として、墨字に置きかえるとひらがなのような表音文字と、アルファベット、数字、かぎカッコや句点などの記号が使われている。しかし、今回の『羅生門』では、読点は使われていなかった。

3 点字版は分かち書きがされている。

前の節で点字の特徴について触れたが、『羅生門』においても漢字が使われない、分かち書きであるという特徴が現れていた。そしてもう一つ特徴的だったのは点字図書では読点が使われていないということだ。この結果から、今回は点字図書の漢字と読点のこのについて絞って、論を進める。

### 3.2.1 点訳と漢字の関係について

#### 3.2.1.1 漢字の使用と意味の理解について

日本語において漢字がなければ表記として成り立たないと考える人たちの意見では、主に、

- 漢字がなければ読みにくい・理解できない（かなだけでは読みにくい）
- 同音異義語の判断がしづらい

これらの二つの意見が出ていた。そこでまずは、点訳された『羅生門』を文字に起こすことによって、この二つを考えてみた。

漢字がなければ読みにくいという点については、分かち書きの効果によっておおむね解消されている。漢字かな交じりの文章に慣れているため、私たちにとっては一見読みづらいが、内容に関してはほとんど読み間違えることがないと考えられる。ただし、同音異義語の問題とも少し関わることであるが、漢字で書いてあることによって、意味を把握しやすいものはいくつもある。

- ・するとその荒れ果てたのをよい事にして、狐狸が棲む。（するとそのあれはてたのをよいことにしてこりがすむ。）
- ・旧記の記者の語を借りれば、「頭身の毛も太る」ように感じたのである。（きゅーきのきしゃのごをかりれば「とーしんのけもふとる」よーにかんじたのである。）
- ・外には、唯、黒洞々たる夜があるばかりである。（そとにわただこくとーとーたるよるがあるばかりである。）

狐狸は音で聞くと分かりづらいが、漢字を見ればキツネとタヌキのことということが分かる。他の単語もそれぞれの漢字の意味を把握すれば、音だと分からないものも理解できる。このような言葉は書き言葉として使うもので、話しているときに理解することは難しい。話し言葉のように表音的なかな遣いをする点字表記では、これらの単語を表しづらいということだ。このような点で、漢字が使われない点訳図書には、不便な点がある。しかしこのような単語を使う場合には注を入れたり、場合によっては言い換えたりすること（狐狸→キツネやタヌキなど）で理解を助けることができる。

同音異義語に関しては、94個の単語に同音異義語が見つかった。しかしそれらは文脈によってどの意味かを判断することができる。今回の『羅生門』においては、漢字がなくてもその判断ができるものしかなかった。

### 3.2.1.2 漢字の意図的な使用について

漢字がなくともほとんど、『羅生門』の内容を捉えることができる。しかし、この小説で「面炮」(にきび)というものが漢字で登場する。現在の感覚では、「にきび」または「ニキビ」としてほとんど漢字を使わない。『羅生門』ではこの面炮が下人の年齢を暗示するだけにとどまらず、下人の心理の変化を表すものとしても登場する、キーワードになるものだ。「面炮」とあえて漢字で書くことによって、注目をさせようとしたのか、それともこの『羅生門』が書かれた当時は漢字で書くことが一般的だったためにただ漢字が使われているのかによって、点訳の際に意味が失われるか、そうでないかが変わってくる。そこで「面炮」が当時漢字が使われていたかを考えていく。

新聞のデータベースをもとに明治・大正期に「にきび」が漢字・ひらがな・カタカナのどれで使われることが多かったのかを調べる。まず朝日新聞社の記事データベース「聞蔵Ⅱ」(12)を使用した。1879年から1926年を対象にした。結果、「にきび」という単語は主に広告で使用され、にきびを治す薬の広告として新聞に掲載されていた。「にきび」は528記事、「ニキビ」は306記事、「面炮」は8記事に登場していた。この中の2記事を除いてすべて広告記事だった。広告は何度も同じ会社から同じ文面で掲載されることがあり、記事数が多くなった。しかし広告においては、漢字を使わず、ひらがなやカタカナが一般的なようだった。

ただ、広告ではない記事に出てきたにきびは漢字のものが使われていた(13)(14)。これらから、「にきび」という単語を使っているときに多く見られるのは漢字以外だが、広告のようなすぐに見て分かるようなものではない場合には、漢字を使うことがあるという可能性があることが分かった。そこで次に読売新聞のデータベース(15)で、広告記事以外で「にきび」はどのような表記をしているのかを調べた(資料 3)。1874年から1926年の広告記事以外の記事は全部で30記事あった。その中で最も多かったのは「ニキビ」で25記事、次に「にきび」で4記事、そして「面皰」は1記事だった。これらの結果から広告記事以外でも一般的なのは漢字以外であると考えられる。

これらの結果から明治・大正期でも「にきび」は漢字で書くことは新聞記事においてはそれほど多くないということが分かる。文学作品の中での使用例を見つけることができなかったが、書き言葉として漢字を使うことは、それほど一般的でないことがうかがえる。そこで『羅生門』ではあえて「面皰」を使った可能性があることが言える。その意図が、注目させるためのものなのかを調べることができなかったが、意図したものであれば、漢字がない点訳図書では、その意図を伝えることができない。この意味で点訳をすると失われてしまう漢字の効果といえる。

### 3.2.1.3 点訳と漢字についてのまとめ

『羅生門』では漢字が使われないことで、内容の理解ができなくなることは、ほとんどなかった。それは同音異義語があったとしても文脈による判断ができたり、分かち書きによって単語の句切れ目が分かったりするからだった。ただ、漢字によって意味が理解しやすい単語もあった

ため、それらには適切に注を付けることが求められる。また、「面皷」という言葉に注目して漢字の効果を考えたが、実際にそれがどのように効果を発揮しているかまでは分からなかったが、意図して漢字を使っている可能性を発見した。意図して漢字を使っているとしたら、漢字のない点訳図書ではその漢字の効果が発揮されない。これらはかぎっこなど記号を用いることである

### 3.2.2 点訳と読点の関係について

#### 3.2.2.1 読点の効果について

句読点の研究をした大類は、句読点を打つ目的について、5つの大原則を挙げている(16)。

- 1 両義を避けるため
- 2 理解困難を解消するため
- 3 読みにくさを解消するため
- 4 語(句)や文の断絶をいち早く知らせるため
- 5 息の切れめ(を分かりやすくするため)

ここでは「句読点」の原則を挙げているので、句点(。)も含まれているが、ここから2つの効果があることが分かる。それは句読点を付けることで、読み手がその文章を理解しやすいようになる(1~4の原則)という効果があることと、文章の中に間を取ることができる(5の原則)という効果があることだ。

また、大類は句読点の効果として「(句読点の)正の効果には二種ある。一は修辭的效果であり、他は文法的效果である」とし、文章を引き立てるため効果と文章を分かりやすくする効果とを挙げている。

これらのことから、読点を付けるということに、作者の何らかの意図を読み取ることができると考えられる。

一方で、点訳したものには、分かち書きをすることで、文章を理解しやすくする工夫が施されている。そのため、文法的効果はほとんど達成されているのではないかと考えられる。ただ、分かち書きでされる、スペースを入れることで、読点の効果である修辭的效果や間のようなものは伝えきれているかが分からない。そこで、まず読点についてみることで何かしらの考察を得られるか検討してみる。

その際に、読点の修辭的效果と文法的効果を分別するために、大類の読点の使い方を参考にして『羅生門』に使われている読点を分類する。この使い方で書かれているのは、ほとんどが、読みやすさを重視したものだ。そこでまずはこの使い方に当てはまるかを考えた後に、それから外れた用法を、修辭的用法と関係があるか調べることにする。

#### 大類の分類

- ⑩ 文が終止しても、変化を持たせるために読点を打て。
- ⑪ 文の中で語句の切れつづきを明らかにしないと、読み誤りや誤解を生ずる場合に打て。
- ⑫ 対等（同格も）の関係で並ぶ、同じ種類の語句の間に打て。
- ⑬ 文の主題となる語（を含む文節）のあとに打て。
- ⑭ 限定・条件を表す前置きの文のあとに打て。
- ⑮ 挿入文の前後に打て。
- ⑯ 時・場合・場所・方法などを表す語句が、文全体を限定するとき、
- ⑰ 接続詞の直後に打て。文中の接続詞は、その前後に打て。
- ⑱ 文頭の副詞のあとに打て。文中の副詞は、その前後に打て。
- ⑲ 感動詞や呼びかけの語のあとに打て。

- ⑳ 語句を隔てて修飾する場合、修飾する語のあとに打て。
- ㉑ 修飾関係上、誤解のおそれのある場合、修飾語のあとに打て。
- ㉒ 倒置の場合、主語（を含む文節）が文中にきたときはその前に、述語が文中にきたときはその後打て。
- ㉓ 接続助詞の「て」「ど」「ども」「けれども」「が」などのあとに打て。
- ㉔ 同じような語句を並べる場合、助詞の「たり」「と」「も」「や」「とか」などのあとに打て。
- ㉕ 「」を助詞のとて受けて叙述のことばに続かない場合に打て。「」を用いない場合には引用文や会話文のあとに打て。
- ㉖ 呼吸の切れめや間のところに打て。
- ㉗ 仮名がつづく場合（漢字がつづく場合も）読みやすいように打て。番号は『そこに句読点を打て！』内で使用されているもの。

### 3.2.2.2 読点の意味と点訳

『羅生門』において読点は400個見つかった(資料4)。大類の読点の使い方の中では⑬、⑭、⑮、⑯、⑰、⑱、⑲、⑳、㉑、㉒、㉓、㉔、㉖、㉗の法則が当てはまった。大類の法則に当てはまらないものは48個あった。大類の法則に当てはまるものから順に、その読点の意味を考えてみる。

まずは、⑬の法則について考える。この法則に当てはまったものは97個だった。この法則読点は、基本的には「は」「が」が出た後につけられる(格助詞の「が」については「は」のように主題を提示するものとは少し使い方が異なるが、今回は主語も主題とほぼ同じこととして、この枠組みに入れた)。まず、なぜこの読点が必要かを考える時に、日本語に置いての主題の役割を考える必要がある。

主題について畠氏は「主題が次の主題に行き当たるまでの領域を自分の領域としてまとめ上げ、文章に構造を与えている」(17)「主題は反復されることによりいくつかの文をまとめ、結束性を生み出」(18)すとして、日本語において、主題が文章の構造に影響を与えることを指摘している。この論では、提題の「は」について述べられたもので、格助詞「が」が同じような機能を持つとは言えないが、「が」は文内において影響を与えるものと言える。

このような点から、日本語において主題（主語）はその文章において重要なものであることが分かる。墨字の文章では、分かち書きがされていないので、読点がないと文字が詰まって読みにくい。重要な役割を担う主題を分かりやすくするために、表記の工夫として読点が付けられる。

一方で、点字図書では文字が詰まって読みにくいということは、分かち書きをされているため、そのような問題は起こらない。そして助詞「は」（点訳した時には「わ」と表記される）「が」によって主題（主語）が何であるかは読めば分かる。その点では点訳でも墨字図書から失われていることがないように思える。しかし主題（主語）の把握という面から考えると、読点があった方が読みやすい可能性がある。

今回の『羅生門』では、主題（主語）が文頭にくる例が半分ほどだった（97例中52例）。句点が付けられたそのあとから、主題（主語）が来るので、その文で何が話題になるのかを把握しやすい。そして、それらの半分以上が、2文節以内であるので何が主題（主語）であるかを把握するのは容易だ。

1 一人の下人が、羅生門の下で雨やみを待っていた。（ひとりのげにんが らしよーもの したで あまやみを まって いた。）

105 下人は、大きな嚏をして、それから、大儀そうに立上った。 (げにんわ おおきな くさめを して それから たいぎそーに たちあがった。)

また、文頭の接続詞のあとに、主題（主語）が来るものは上の例と同じように判断をしやすい。

179 しかし、その手は、次の瞬間には、もう鼻を掩う事を忘れていた。 (しかし その てわ つぎの しゅんかんにわ もー はなを おおう ことを わすれて いた。)

これらは、主題（主語）の前にあまり多くの情報がないということが共通している。そのために、読点による主題（主語）の強調がなくとも読むことができる。しかし、文中に主題（主語）が来るときや、多くの文節によって成り立つ主題（主語）の時は、修飾関係が複雑になったり、主題（主語）がどこからどこまでかを判断したりすることが、読点なしでは読みにくくなることがある。

132 下人は、始めから、この上にいる者は、死人ばかりだと高を括って いった。 (げにんわ はじめから この うえに いる ものわ しにんばかりだと たかを くくって いた。)

この 132 の場合、墨字で表記されたものは、「始めから」の前後に読点が付けられているため、「この上にいるものは死人だけだ」ということを楼へ上るはじめから、下人は思っていた、というように難なく読むこ

とができる。しかし点字の方では、最初の主題である「下人は」のあとに切れ目がないので、「始めから（以前から）この上にいる者は」と次の主題を取ってしまう恐れがある。もちろん、これはその後の文脈から意味をとり違えたままになるということはないのだが、読点を付けておけば、そのような読み違いを起さずにスムーズに読むことができる。

今回は主題(主語)に多くの修飾がされているものは特になかったが、そのような場合もどこからどこまでが主題(主語)なのかを判断するのは、読点なしでは読みにくいだろう。

これらのことから、主題(主語)を表す読点は、墨字図書において、字のつまりをなくして主題(主語)を見やすくするためだけのものではなく、どこからどこまでが主題(主語)なのかを分かりやすくするためのものでもあった。今回の点訳の『羅生門』では、大類の13の法則の読点はなくてもほとんど読み間違えたり、読みづらかったりするということではなかった。そのため、分かち書きでほとんどの場合は文法的効果を果たしている。しかし一部で読みづらいものがあるため、墨字版のように13の法則の読点を付けた方がよい。

次に大類の法則⑭について考える。これには7個があてはまった。これらを見ると、なくとも意味を間違えるようなものではなかった。これは、分かち書きがされていない墨字の文章を読みやすくするための読点だ。この中で特徴的なものとして2つの例を挙げる。

260 「何をしていた。云え。云わぬと、これだぞよ。」 (「なにをしていた。 いえ。 いわぬと これだぞよ」)

378 「では、己が引剝をしようと恨むまいな。己もそうしなければ、餓

死をする体なのだ。」（「でわ おれが ひはぎを しよーと うらむ  
まいな。 おれも そー しなければ うえじにを する からだなの  
だ」)

この二つの例は、どちらも下人の発話の中にあるものだ。発話の中で読点が使われているときは、その発話者の息継ぎだったり、間の取り方だったりすることがある。

260 の発話は、悪を憎む心から老婆を捕えた時のものだ。この発話のあとには太刀を老婆に突きつけている。しだいに下人は冷静になるが、この発話時点では怒りで興奮状態になっている。そのような場面で「云わぬと」と「これだぞよ」の短い言葉を区切って言わないだろう。ここに働いているのは墨字の書き言葉としての習慣だ。また、この 260 の例では、「云わぬと」と「これだぞよ」の間に読点を入れなければ、ひらがなが連続して読みづらいという特徴がある。これも墨字の分かち書きをしないという特徴から起こったものだ。ここではむしろ読点がない方が場のスピード感を伝えられる。

378 の発話は老婆の話聞いた後に、老婆の着物を剥ぎとる時のものだ。この発話のあとに下人はすばやく逃げ去ってしまう。そのような点から考えると「己もそうしなければ」と「餓死をする体なのだ」の間に一呼吸を入れるようなゆっくりとした口調ではないはずだ。これも書き言葉としての習慣から付けられた読点だろう。

二つの例から、読みやすさとしての読点の付け方では、その話のスピード感を損なってしまう可能性がある。点訳のものを見ると、句点で区切られているところ以外は一息で読むことができる。この面では、分かち書きによって読点をなくしただけであったとしても、点訳したものの

方が、むしろその内容を伝えられていたと考えることができる。

次に大類の法則の⑮について考える。これは3例しかなかった。これは挿入文が何かを分かりやすくするための読点だ。その中で特に二つを比較して考える。

40 一尤も今日は、刻限が遅いせいか、一羽も見えない。 (一 もつとも きよ一わ こくげんが おそい せいか 1わも みえない。)

155 見ると、楼の内には、噂に聞いた通り、いくつかの屍骸が、無造作に棄ててあるが、… (みると ろ一の うちにわ うわさに きいたとおり いくつかの しがいが むぞーさに すてて あるが…)

40 はその文全体が、ダッシュ (一) で始まるものなので、40 の読点が挿入を表すというよりも、ダッシュによってその文章全体が挿入だということを表している。点字図書にもダッシュは用いられているため、挿入文を表すという機能はこの記号によって果たされている。

155 は「見ると」と、その見た結果分かった「いくつかの屍骸が」あることの間挿入されている。読点によってほかのことが挿入されることが分かりやすい。点訳の方を見ると、「見ると」にかかるものが離れてあるために何にかかるか分かりにくくなっている。40 の例とは異なり、ここではダッシュが使われていないので、挿入を分かりやすくするためには読点があった方がよい。ただ、二つの例を見ると、ダッシュの用法が挿入を表すものであり、読点ほど多くの使われ方をしていない。墨字図書でも点字図書でも挿入文の前には読点ではなく、ダッシュの方が分かりやすいということが分かる。

次に⑩を見る。これは 31 例見つけることができた。大類は「時・場合・場所・方法などの語句が、読点で区切られることにより、明確化され」(19) として、この項目を入れている。これも墨字表記で、目を見た時に分かりやすいようにする工夫だと考えられる。点訳されたものにも必要なものなのかを考える。この中で読点がないと分かりづらい・読み間違えると感じたものは、特になかった。これらの時・場合・場所などを表す語句のあとには、助詞の「に」「で」「には(にわ)」などが使われているため、それらの語句が時などを表しているということが分かるからだった。点字図書は、どちらかというと言声的に読み取るものなので、助詞の使われ方で判断できるようだった。また、⑬の法則で述べたように、主題(主語)が影響を与える文章ということから、主に文の最初の方にある⑩の時・場所などを表す言葉のあとにくる、主題(主語)をこの読点で区切ることで、見やすくするかということ考えた。しかし、今回の『羅生門』ではこれらの語句が出た直後に主題(主語)が出る例はそれほど多くなかった(29 例中 8 例)。⑩の読点は墨字における視覚的な役割が大きい。だから点訳したものにこの読点がないことによる影響はそれほどない。

次に⑪の読点を考える。これは接続詞のあとに主につけられる読点のことだ。接続詞は全体で 44 個あり、その中で 12 個は読点が付けられていなかった。同じ接続詞でも読点を使っているものと、使っていないものがある。ここから何らかの差異を見つけてきたら、読点の効果も分かると考えた。

## 読点なしの接続詞

- ・ そこで 洛中のさびれ方は一通りではない。
- ・ すると その荒れ果てたのをよい事にして、狐狸が棲む。
- ・ 所が その主人からは、四五日前に暇を出された。
- ・ だから 「下人が雨やみを待っていた」と云うよりも「雨にふりこめられた下人が、行き所がなくて、途方にくれていた」と云う方が、適当である。
- ・ しかし この「すれば」は、何時までたっても、結局「すれば」であった。
- ・ そうして 体を出来る丈、平らにしながら、頸を出来る丈、前へ出して、恐る恐る、楼の内を覗いて見た。
- ・ しかし 下人にとっては、この雨の夜に、この羅生門の上で、死人の髪の毛を抜くと云う事が、それ丈で既に許す可らざる悪であった。
- ・ そうして 聖柄の太刀に手をかけながら、大股に老婆の前へ歩みよった。
- ・ しかし 勝敗は、はじめから、わかっている。
- ・ そうして この意識は、今までけわしく燃えていた憎悪の心を、何時の間にか冷ましてしまった。
- ・ だから お前に縄をかけて、どうしよう云うような事はない。
- ・ そうして 失望すると同時に、又前の憎悪が、冷な侮蔑と一しょに、心の中へはいつて来た。

「そこで」は「それゆえ、そのため」の意味で用いられている。6つあり（「下人はそこで、」を含む）、そのうち一つにだけ読点が使われていない。読点が付けられているものは一つを除いて、下人の考えが前の文にあり、それと次の文の下人の動作をつなぐために「そこで、」が使われ

ている。また、その後に「下人は、」と短い間に読点が続くことで、下人が次にする行動に注目させる効果がある。読点が付けられていないものは、特に下人の考えや動作が前後に表れておらず、一文も短い。違いを挙げるとすれば、このような特徴がある。意味に違いを持たせるものではなく、注目させるところを作り出すものだった。その点では、全く読点を使っていない点字図書にはその効果が現れていない。

「すると」は5つあり、一つが読点のないものだった。読点があるものとないものの差異を特に見つけられなかった。読点がないことによつて、読み間違いをするようなものでもない。これは点字図書になくてもそれほど影響がない読点だった。そして「しかし」と「そして」も読点が付けられているものと、付けられていないものを見つけたが、それらもその差異を見つけないことができなかった。

「そこで」については少しの差がありそうだったが、基本的には読点を付けないことにあまり意味はないと考えられる。だからこの読点は意味的には必要だとは言いきれないものかもしれない。ただ、読点があることで接続詞の働きである、前の文とのつながりが分かりやすくなる。それを目立たせる意味ではあった方が読者にとっては読みやすい。それは墨字図書でも点字図書でも同じことだ。このような意味での読点の効果が発揮されないということが点字図書の点訳にはある。

次に⑱について考える。これは61個見つけることができた。この読点は副詞の前後に付けられるものだ。副詞は呼応の関係があるものも多いため、どのことばにその副詞がかかっているのかを考えることは比較的やさしい。そのため、読点があってもなくても読み間違いをするということはほとんどないようだった。これも墨字の文章を読みやすくする

ための工夫であって、点字図書にはなくてもよいものだった。

⑩は感動詞などのあとに付けられる読点だ。これは4つあり、そのうちの3つは発話文の中に現れるものだった。そしてそれ以外の一つは、『羅生門』の中に出てくる作者が下人の心情について説明しているところに出てくる。一つを除いて会話文の中にあるものなので、その読点が、間や息遣いを表すものなのかを考えなければならない。

244 「おのれ、どこへ行く。」（「おのれ どこえ いく」）

321 「成程な、死人の髪を抜くと云う事は、何ぼう悪いことかも知れぬ。…」（「なるほどな しびとの かみのけを ぬくと いう ことわ なんぼー わるい ことかも しれぬ。…」）

333 「…それもよ、この女の売る干魚は、味がよいと云うて、太刀帯もが、欠かさず菜料に買っていったそうなの。…」（「…それもよ このおんなの うる ほしうおわ あじが よいと いうて たてわきどもが かかさず さいりょーに かって いたそーな。…」）

244の例は、⑩の法則に当てはまるとともに、⑳の法則にも当てはまるものだ。読点なしで表記すると、「おのれどこへ行く」となり、ひらがなが続き、句切れが分かりづらいために墨字表記では読みづらい。その点は、点字図書において分かち書きで区切れが分かりやすくなっている。また、間の問題だが、これは一息に言っているか区切って言っているのか判断がつかない。⑭の法則の時のように、スピード感はあるものだと考えられるが、呼びかけとして「おのれ」を使ったならそこに一瞬の間があっても良さそうだ。単にひらがなの連続を嫌って、読点を使ったとも、間を重視したものとも言えそうな読点だ。間を重視しているなら

分ち書きだけでは伝えきれていない。

321 と 333 はどちらも老婆の発言からだ。この老婆の発言は「老婆は、大体こんな意味の事を云った」とされているので、そのまま老婆の発言とは言い切れないが、その発言を「口ごもりながら」言っていた。それを考えると、この老婆の発言はつかえながら言っている様子を表す読点とも考えられそうだ。この老婆の発言の中には、大類の法則に当てはまらない読点も使われていることからそれがうかがえる。読点があることでそこに間があることを感じるができるが、読点がないとどこにも詰まることなく読めてしまう。その点では、点訳図書で読点がないことで表現しきれていないところだ。

次に⑳について考える。これは修飾の関係を分かりやすくするための読点だ。これは 18 個見つかった。これらは修飾する言葉が増えるにつれて、何に修飾をしているのかが分かりづらくなるため、付けられている。

115・116 すると、幸門の上の楼へ上る、幅の広い、これも丹を塗った  
梯子が眼についた。(すると さいわい もんの うえの ろーえ の  
ぼる はばの ひろい これも にを ぬった はしごが めに つい  
た。)

185～188 檜皮色の着物を着た、背の低い、痩せた、白髪頭の、猿のよ  
うな老婆である。(ひわだいろの きものを きた せの ひくい や  
せた しらが あたまの さるのよーな ろーばで ある。)

115・116 はどちらも「梯子」に修飾することを分かりやすくするため

に読点が付けられている。この文では「これ」という指示語が出てくる。「これ」は梯子のことを指しているが、この時点では「梯子」が出ていないので、少し読みづらい。115・116 の読点があることで「もの　う　えの　ろーえ　のぼる　はばの　ひろい　これも」でも「はばの　ひろい　これも」でもないことがすぐに分かる。確かに文脈上、どちらもなりえないことは分かる。しかし読点がついてさえいればどこで区切れるのかが分かりやすいので、そのような誤解をしなくてよくなる。これは墨字においても点字においても読解の上であるべき読点だ。

185～188 では老婆を形容するものを連ねている。墨字の方では読点がなければ詰まって読みづらいという問題もあるが、単純にどこで切れるのか分からない(「檜皮色の着物を着た背の低い痩せた白髪頭の猿のような老婆である」)。読点が付けられることで、最後の「老婆」にかかっていることが分かりやすい。それは点字の方も同様だ。何が何を修飾しているのかということは、修飾語が多くなればなるほど分かりづらい。それを読点を付けることで、読者が分かりやすくなる工夫がされている。その点では、修辭的効果ではないが、点字図書にもとても必要な読点と言える。

⑳の読点は 91 個あった。これは順接や逆接の助詞のあとに使われる読点だ。最も多く使われているが、この読点は助詞によって意味を把握できるもので、点訳図書でされている、分かち書きのスペースとほぼ同じような役目をしている。そのため点訳図書にこの読点が使われなくとも意味などの理解には問題がない。

㉑は 4 つの読点を見つけた。これらは助詞の使い方で、ほかにも何か

同じような語句が続くことが分かる。墨字の文章での読みやすさを考えた時にはあってもいいが、点字図書の場合にはそれほど必要ではない。

②⑥には2つの読点が挙げられる。息遣いなどが分かるように付けられる。次に例示するものは老婆が下人に何をしていたのかを答える時の発話だ。

307・308 「この髪を抜いてな、この髪を抜いてな、鬢にしようと思うたのじゃ。」（「この かみを ぬいてな この かみを ぬいてな かずらに しょーと おもーたのじゃ」）

これは老婆が「喘ぎ喘ぎ」言ったものとなっている。短い言葉を区切りながら話していることがこの読点から分かる。これは私が点字からひらがなに文字を起していたときに感じたことなのだが、「この かみをぬいてな」という言葉が2回も出てくるので、間違っただけで点訳されたのかと一瞬思ってしまった。読点があれば意図的に二つあるということが分かりやすいのだが、読点がないとただの間違いにも見えるのではないかと思った。そのような点でも息遣いを表すものだとすれば点訳図書にも使うべき読点だ。

②⑦は1つだった。これはひらがなや漢字の連続を避けるために付けられる読点だ。

255 しかし勝敗は、はじめから、わかっている。

255 が「しかし勝敗は、始めからわかっている」であれば読点を付け

なくてもそれほど意味に変化もなく読むことができる。「下人は、始めから、この上にいる者は、死人ばかりだと高を括っていた」という文があるが、これは「始めから」と「この上にいる者は」の間に読点がなければ意味が変わってきてしまう。その点で 255 のものと異なる使い方をしている。このようなひらがなの連続を避けるために使われているものは、分かち書きによって問題は解決される。その点では点字図書にとってはこのような読点を用いなくてもよい。ただこれらの 2 文については、前の文で「始めから」と漢字を使っているので統一した方が墨字の文章の時にはまとまりがあったのかと思う。

最後に大類の法則の中にあてはめることができなかつた読点について考える。これらに修辭的な効果があると考えられるものを見つけることができなかつた。大類の分類にはなかつた助詞に読点を付けているものばかりでどれも見た目上の機能のようだった。ただ、助詞「を」には読点が付くものと、付かないものがあるが、その違いは目的語と述語が離れている場合には読点を付けるというものだった。読みやすさを考慮したものと考えられるが、点字図書でその読点がないからといってそれほど影響がないようだった。それは目的語と述語の関係がはっきりわかるからだ。

ここまで、大類の法則を参考にしながら読点の有無における効果を考えた。読点の付け方としては、墨字の文章の時の読みやすさを意識して打たれたものが多いということが分かつた。それは墨字の文章が分かち書きをしない書き方のためであり、分かち書きをしている点字図書には必要がない場合がある。しかし読点のもう一つの役割として誤読を防ぐ

ためというものがある。それを考えると、読点があった方が点訳図書の場合でも必要と思える箇所はいくつか見つかった。また老婆の喘ぎながら話していることも読点があることで伝えられるという効果もあった。このような点から、点訳をする際にも読点も原文と同じように付けた方がよいということが言える。

一方で点訳する際に原文にはあっても付けなくても良いと思えるような読点が少ないがあった。それは主に登場人物たちの発話の中に現れるもので、発話の中にも書き言葉としての読点が用いられているものだ。発話のなかの読点は、発話者の息継ぎなど間の取り方を表すものの場合がある。しかし、今回の『羅生門』では、⑭の法則のところ述べてように、ない方がむしろ自然な発話のようなものもある。これは分かち書きをしている点字図書なら読点を使わなくても表現できるものでもある。

このようにどの読点が必要かを考えながら点訳するのは大変だ。そのため、せめて原文に使われている読点は何かしらの効果があると考え、点訳する際にもその読点を付けるべきだ。

### 3.3 墨字図書の点訳についてのまとめ

今回は漢字と読点の問題について点訳する際に、何か変化することがあるかを考察した。その結果、内容の理解という点ではほとんど墨字図書のものから意味を損なわずに伝えられていることが分かった。ただ、漢字でも読点でも作者の意図が感じられるところは、やはり原文のように表記されていないとそれを伝えきれない可能性がある。しかしこれらの意図を読み取りながら点訳するということは困難だ。そのため漢字に関しては特徴的な表され方をしている場合に注を付けたり、「」等の記号で強調したりすることで対応することが望まれる。読点に関しては、点

訳する際に不要と考えられるものもあるが、読点が効果を発揮するものもあるため、基本的には原文通りに付けるという方針でよいだろう。

おわりに

本論文で、障害者の読書環境について、主に点字図書館の役割や蔵書状況に着目した論と点字図書に着目した論を展開した。

点字図書館はいまだ法律の観点から見ると確立されておらず、一般の図書館とは異なる扱いを受けている。また、蔵書調査をして気づいたことに、全国の点字図書館の蔵書数を合わせても、栃木市立図書館の蔵書数と同程度しかないということがある。この二つを比較した時には、学術書の蔵書数にそれほど差がなかった。しかし障害を持たない人は、他の地域の図書館で探したり、書店で自由に買うことができたりすることを考えると、蔵書数が明らかに少ないということが分かる。これは墨字で出版されたものを様々な媒体に翻訳する必要があるために、時間がかかったり、多く翻訳することができなかつたりするからだ。一方で、昨今では電子書籍で、読みあげ機能や色の反転などができるものが販売されてきた。これらは墨字の図書を読むのが困難な人々の助けになるものだ。一般の書籍として発行するだけでなく、電子書籍も同様に発行することが、障害者たちの読書環境をよりよくできるため、出版社にはぜひ電子書籍の発行とその工夫をしていただきたい。

点字図書については墨字の図書と異なる独特な書き方があった。それでも内容に関して墨字の図書とほとんど変わらず、伝えることができている。しかし主に修辭的な表現において、完全には伝えきれていないところもあるようだった。それも工夫次第で解消できるものだ。そのため点訳やその他の翻訳をする際には、内容の深い理解が翻訳者には必要とされる。点字図書館は翻訳のボランティアの養成をしているが、その際

に技術面だけでなく、読解面での支援も求められる。

#### 資料 1 サピエ図書と栃木市立図書館の蔵書状況

蔵書の有無については「有無」欄の数字で表している。

1 はサピエ図書館・栃木市立図書館どちらにも蔵書があるもの

2 は栃木市立図書館にだけ蔵書があるもの

3 はサピエ図書館にだけ蔵書があるもの

4 はどちらにも蔵書がないもの

それぞれを表している。また、目録として参考にした『AERA MOOK』に掲載されていたものと訳者や出版社が異なるものを蔵書している場合も、蔵書ありとしている。

## 資料2 点訳版『羅生門』

本文は日本点字図書館所蔵の『羅生門・鼻』をひらがなで文字に起こした。濁音・半濁音、拗音、数詞等の表記の仕方は実際とは異なるが、墨字で表す都合上で、少し改変を加えながら表している。

らしょーもん

ある ひの くれがたの ことである。 ひとりの げにんが らしょーもんの したで あまやみを まって いた。

ひろい もんの したにわ この おとこの ほかに だれも いない。 ただ ところどころ にぬりの はげた おおきな まるぼしらに きりぎりすが 1ぴき とまって いる。 らしょーもんが すぐ おおじに ある いじょーわ この おとこの ほかにも あまやみをする いちめがさや もみえぼしが もー 2, 3にんわ ありそーな ものである。 それが この おとこの ほかにわ だれも いない。

なぜかと いうと この 2, 3ねん きょーとにわ じしんとか つじかぜとか かじとか ききんとか いう わざわいが つづいて おこった。 そこで らくちゅーの さびれかたわ ひととおりでわ ない。 きゅーきに よると ぶつぞーや ぶつぐを うちくだいて その にが ついたり きんぎんの はくが ついたり した きを みちばたに つみかさねて たきぎの しろに うって いたと いう ことである。 らくちゅーが その しまつで あるから らしょー

もんの しゅーりなどわ もとより だれも すてて かえりみる ものが なかった。すると その あれはてたのを よい ことに して こりが すむ。ぬすびとが すむ。とーとー しまいにわ ひきとりての ない しにんを この もんえ もって きて すてて いくと いう しゅーかんさえ できた。そこで ひのめが みえなくなると だれでも きみを わるがって この もんの きんじょえわ あしぶみを しない ことになっ て しまったので ある。

その かわりまた からすが どこからか たくさん あつまってきた。ひるま みると その からすが なんわと なく わを えがいて たかい しびの まわりを なきながら とびまわって いる。ことに もんの うえの そらが ゆーやけで あかくなる ときに わ それが ごまを まいたよーに はっきり みえた。からすわ もちろん もんの うえに ある しにんの にくを ついばみに くるので ある。— もっとも きょーわ こくげんが おそい せい か 1わも みえない。ただ ところどころ くずれかかった そーして その くずれめに ながい くさの はえた いしだんの うえに からすの くそが てんてんと しろく こびりついて いるのが みえる。げにんわ 7だん ある いしだんの いちばん うえの だんに あらいざらした こんの あおの しりを すえて みぎの ほおに できた おおきな にきびを きに しながら ぼんやり あめの ふるのを ながめていた。

さくしゃわ さっき 「げにんが あまやみを まって いた」と かい た。しかし げにんわ あめが やんでも かくべつ どーしよーと いう あてわ ない。ふだんなら もちろん しゅじんの いええ かえるべき はずで ある。ところが その しゅじんからわ

4, 5 にち まえに ひまを だされた。 まえにも かいたよーに と  
ーじ きよーとの まちわ ひとつおりにならず すいびして いた。  
いま この げにんが ながねん つかわれて いた しゅじんから  
ひまを だされたのも じつわ その すいびの ちいさな よはに  
ほかならない。 だから 「げにんが あまやみを まって いた」と  
いうよりも 「あめに ふりこめられた げにんが ゆきどころが な  
くて とほーに くれて いた」と いう ほーが てきとーで ある。  
そのうえ きよーの そらもよーも すくなからず この へいあんち  
よーの げにんの Sentimentalism に えいきよーした。 さるの  
こく さがりから ふりだした あめわ いまだに あがるけしきが  
ない。 そこで げにんわ なにを おいても さしあたり あすの  
くらしを どーにか しよーと して — いわば どーにも ならな  
い ことを どーにか しよーと して とりとめも ない かんがえ  
を たどりながら さっきから すぎく おおじに ふる あめの お  
とを きくとも なく きいて いたので ある。

あめわ らしよーもんを つつんで とおくから ざあっと いう  
おとを あつめて くる。 ゆーやみわ しだいに そらを ひくく  
して みあげると もんの やねが ななめに つきだした いらかの  
さきに おもたく うすぐらい くもを ささえて いる。

どーにも ならないことを どーにか するためにわ しゅだんを  
えらんで いる いとまわ ない。 えらんで いれば ついじの し  
たか みちばたの つちの うえで うえじにを するばかりで ある。  
そーして この もんの うええ もって きて いぬのよーに すて  
られて しまうばかりで ある。 えらばないと すれば — げにん  
の かんがえわ なんども おなじ みちを ていかいした あげくに

やっと この きょくしよえ ほーちやくした。しかし この 「すれば」わ いつまで たっても けっきょく 「すれば」で あった。げにんわ しゅだんを えらばないと いう ことを こーていしながらも この 「すれば」の かたを つける ために とーぜん そののちに きたるべき 「ぬすびとに なるより ほかに しかたがない」と いう ことを せっきょくてきに こーていするだけの ゆーきが すでに いたので ある。

げにんわ おおきな くさめを して それから たいぎそーに たちあがった。ゆーびえの する きょーとわ もー ひおけが ほしいほどの さむさで ある。かぜわ もんの はしらと はしらとの あいだを ゆーやみと ともに えんりよ なく ふきぬける。にぬりの はしらに とまって いた きりぎりすも もー どこかえ いって しまった。

げにんわ くびを ちぢめながら やまぶきの かざみに かさねた こんの あおの かたを たかく して もんの まわりを みまわした。あめかぜの うれえの ない ひとめに かかる おそれの ない ひとばん らくに ねられそーな ところが あれば そこで ともかくも よるを あかそーと おもったからで ある。すると さいわい もんの うえの ろーえ のぼる はばの ひろい これも にを ぬった はしごが めに ついた。うえなら ひとが いたにしても どーせ しにんばかりで ある。げにんわ そこで こしに さげた ひじりづかの たちが さやばしらないよーに きを つけながら わらぞーりを はいた あしを その はしごの いちばん したの だんえ ふみかけた。

それから なんぷんかの のちで ある。らしょーもんの ろーの

うええ てる はばの ひろい はしごの ちゅーだんに ひとりの  
おとこが ねこのよーに みを ちぢめて いきを ころしながら う  
えの よーすを うかがって いた。 ろーの うえから さす ひの  
ひかりが かすかに その おとこの みぎの ほおを ぬらして い  
る。 みじかい ひげの なかに あかく うみをもった にきびの  
ある ほおで ある。 げにんわ はじめから この うえに いる  
ものわ しにんばかりだと たかを くくって いた。 それが はし  
ごを 2, 3だん あがって みると うえでわ だれか ひを とぼ  
して しかも その ひを そこここと うごかして いるらしい。  
これわ その にごった きいろい ひかりが すみずみに くものす  
を かけた てんじょーうらに ゆれながら うつったので すぐに  
それと したたので ある。 この あめの よるに この らしよー  
もんの うえで ひを ともして いるからわ どーせ ただの もの  
でわ ない。

げにんわ やもりのよーに あしおとを ぬすんで やっと きゅー  
な はしごを いちばん うえの だんまで ほうよーに して のぼ  
りつめた。 そーして からだを できるだけ たいらに しながら  
くびを できるだけ まええ だして おそるおそる ろーの うちを  
のぞいて みた。

みると ろーの うちにわ うわさに きいた とおり いくつかの  
しがいが むぞーさに すてて あるが ひの ひかりの およぶ は  
んいが おもったより せまいので かずわ いくつとも わからない。  
ただ おぼろげながら しれるのわ その なかに はだかの しがい  
と きものを きた しがいとが あると いう ことである。 も  
ちろん なかにわ おんなも おとこも まじって いるらしい。 そ

ーして その しがいわ みな それが かつて いきて いた にんげんだと いう じじつさえ うたがわれるほど つちを こねて つくった にんぎょーの よーに くちを あいたり てを のぼしたりして ごろごろ ゆかの うえに ころがって いた。 しかも かたとか むねとかの たかく なって いる ぶぶんに ぼんやり したひの ひかりを うけて ひくくなっている ぶぶんの かげを いっそー くらく しながら えいきゅーに おしのごとく だまっていた。

げにんわ それらの しがいの ふらんした しゅーきに おもわず はなを おおった。 しかし その てわ つぎの しゅんかんにわもー はなを おおう ことを わすれて いた。 ある つよい かんじょーが ほとんど ことごとく この おとこの きゅーかくを うばって しまったからで ある。

げにんの めわ その とき はじめて その しがいの なかに うづくまって いる にんげんを みた。 ひわだいろの きものを きた せの ひくい やせた しらが あたまの さるのよーな ろーばである。 その ろーばわ みぎの てに ひを ともした まつの きぎれを もって その しがいの ひとつの かおを のぞきこむよーに ながめて いた。 かみのけの ながい ところを みると たぶん おんなの しがいで あろー。

げにんわ 6ぶの きょーふと 4ぶの こーきしんとに うごかされて ざんじわ いきを するのさえ わすれて いた。 きゅーきの きしゃの ごをかりれば 「とーしんの けも ふとる」 よーに かんじたので ある。 すると ろーばわ まつの きぎれを ゆかいたの あいだに さして それから いままで ながめて いた しがい

の くびに りよーてを かけると ちょーど さるの おやが さる  
の この しらみを とるよーに その ながい かみのけを 1ぼん  
ずつ ぬきはじめた。 かみわ てに したがって ぬけるらしい。

その かみのけが 1ぼんずつ ぬけるのに したがって げにんの  
こころからわ きよーふが すこしずつ きえて いった。 そーして  
それと どーじに この ろーばに たいする はげしい ぞーおが  
すこしずつ うごいて きた。 — いや この ろーばに たいする  
と いったわ ごへいが あるかも しれない。 むしろ あらゆる  
あくに たいする ほんかんが 1ぶんどに つよさを まして き  
たので ある。 この とき だれかが この げにんに さっき も  
んの したで この おとこが かんがえて いた うえじにを する  
か ぬすびとに なるかと いう もんだいを あらためて もちだし  
たら おそらく げにんわ なんの みれんも なく うえじにを え  
らんだ ことであろー。 それほど この おとこの あくを にく  
む こころわ ろーばの ゆかに さした まつの きぎれのよーに  
いきおい よく もえあがりだして いたので ある。

げにんにわ もちろん なぜ ろーばが しにんの かみのけを ぬ  
くか わからなかった。 したがって ごーりてきにわ それを ぜん  
あくの いずれに かたづけて よいか しらなかつた。 しかし げ  
にんに とってわ この あめの よるに この らしよーもの う  
えで しにんの かみのけを ぬくと いう ことが それだけで す  
でに ゆるすべからざる あくで あつた。 もちろん げにんわ さ  
っきまで じぶんが ぬすびとに なる きで いた ことなぞわ と  
ーに わすれて いるので ある。

そこで げにんわ りよーあしに ちからを 入れて いきなり は

しごから うええ とびあがった。 そーして ひじりづかの たちに  
てを かけながら おおまたに ろーばの まええ あゆみよった。  
ろーばが おどろいたのわ いうまでも ない。

ろーばわ ひとめ げにんを みると まるで いしゆみに でも  
はじかれたよーに とびあがった。

「おのれ どこえ いく」

げにんわ ろーばが しがいに つまづきながら あわてふためいて  
にげよーと する ゆくてを ふさいで こー ののしった。 ろーば  
わ それでも げにんを つきのけて いこーと する。 げにんわ  
また それを いかすまいと して おしもどす。 ふたりわ しがい  
の なかで しばらく むごんの まま つかみあった。 しかし し  
よーはいわ はじめから わかって いる。 げにんわ とーとー ろ  
ーばの うでを つかんで むりに そこえ ねじたおした。 ちょー  
ど とりの あしのよーな ほねと かわばかりの うでで ある。

「なにを していた。 いえ。 いわぬと これだぞよ」

げにんわ ろーばを つきはなすと いきなり たちの さやを は  
らって しろい はがねの いろを その めの まええ つきつけた。  
けれども ろーばわ だまって いる。 りよーてを わなわな ふる  
わせて かたで いきを きりながら めを がんきゅーが まぶたの  
そとえ でそーに なるほど みひらいて おしのよーに しゅーねく  
だまって いる。 これを みると げにんわ はじめて めいはくに  
この ろーばの せいしが ぜんぜん じぶんの いしに しはいされ  
て いると いう ことを いしきした。 そーして この いしきわ  
いままで けわしく もえて いた ぞーおの こころを いつのまに  
か さまして しまった。 あとに のこったのわ ただ ある しご

とを　して　それが　えんまんに　じょーじゅした　ときの　やすらかな　とくいと　まんぞくが　あるばかりで　ある。　そこで　げにんわ　ろーばを　みおろしながら　すこし　こえを　やわらげて　こー　いった。

「おれわ　けびいしの　ちょーの　やくにんなどでわ　ない。　いましがた　この　もんの　したを　とおりにかかった　たびの　ものだ。　だから　おまえに　なわを　かけて　どー　しよーと　いうよーな　ことわ　ない。　ただ　いまじぶん　この　もんの　うえで　なにを　して　いたのだから　それを　おれに　はなしさえ　すれば　いいのだ」

すると　ろーばわ　みひらいた　めを　いっそー　おおきく　して　じっと　その　げにんの　かおを　みまもった。　まぶたの　あかくな　った　にくしよくちょーのよーな　するどい　めで　みたので　ある。　それから　しわで　ほとんど　はなと　ひとつに　なった　くちびるを　なにか　ものでも　かんで　いるよーに　うごかした。　ほそい　のど　で　とがった　のどぼとけの　うごいて　いるのが　みえる。　その　とき　その　のどから　からすの　なくよーな　こえが　あえぎ　あえぎ　つたわって　きた。

「この　かみを　ぬいてな　この　かみを　ぬいてな　かずに　しよーと　おもーたのじゃ」

げにんわ　ろーばの　こたえが　ぞんがい　へいぼんなのに　しつぼーした。　そーして　しつぼーすると　どーじに　また　まえの　ぞーおが　ひややかな　ぶべつと　いっしょに　こころの　なかえ　はいつて　きた。　すると　その　けしきが　せんぼーえも　つーじたので　あろー。　ろーばわ　かたてに　まだ　しがいの　あたまから　とった　ながい　ぬけげを　もったなり　ひきの　つぶやくよーな　こえで　く

ちごもりながら こんな ことを いった。

「なるほどな しびとの かみのけを ぬくと いう ことわ なんぼ一 わるい ことかも しれぬ。 じゃが ここに いる しびとどもわ みな そのくらいな ことを されても いい にんげんばかりだぞよ。 げんざい わしがいま かみを ぬいた おんななどわなへびを 4すんばかりずつに きって ほしたのを ほしうおだと いうて たてわきの じんえ うりに いんだわ。 えやみに かかってしななんたら いまでも うりに いんで いた こと である。 それもよ この おんなの うる ほしうおわ あじが よいと いうて たてわきどもが かかさず さいりょーに かって いたそーな。 わしわ この おんなの した ことが わるいとわ おもーて いぬ。 せねば うえじにを するのじゃて しかたが なく した こと である。 されば いま また わしの して いた ことも わるい こととわ おもわぬぞよ。 これとても やはり せねば うえじにを するじゃて しかたが なく する ことじゃわいの。 じゃて その しかたが ない ことを よく しって いた この おんなわ おおかた わしの する ことも おおめに みて くれるで あり」

ろーばわ だいたい こんな いみの ことを いった。

げにんわ たちを さやに おさめて その たちの つかを ひだりの てで おさえながら れいぜんと して この はなしを きいて いた。 もちろん みぎの てでわ あかく ほおに うみをもった おおきな にきびを きに しながら きいて いるのである。 しかし これを きいて いるうちに げにんの こころにわ ある ゆーきが うまれて きた。 それわ さっき もんの したで この おとこにわ かけて いた ゆーきで である。 そーして また さっ

き この もんの うええ あがって この ろーばを とらえた と  
きの ゆーきとわ ぜんぜん ほんたいな ほーこーに うごこーと  
する ゆーきで ある。 げにんわ うえじにを するか ぬすびとに  
なるかに まよわなかつたばかりでわ ない。 その ときの この  
おとこの ところもちから いえば うえじになどと いう ことわ  
ほとんど かんがえる ことさえ できないほど いしきの そとに  
おいだされて いた。

「きつと そーか」

ろーばの はなしが おわると げにんわ あざけるよーな こえで  
ねんを おした。 そーして ひとあし まええ だと ふいに み  
ぎの てを にきびから はなして ろーばの えりがみを つかみな  
がら かみつくよーに こー いった。

「でわ おれが ひはぎを しよーと うらむまいな。 おれも そ  
ー しなければ うえじにを する からだなのだ」

げにんわ すばやく ろーばの きものを はぎとった。 それから  
あしに しがみつこーと する ろーばを てあらく しがいの うえ  
え けたおした。 はしごの くちまでわ わずかに 5ほを かぞえ  
るばかりで ある。 げにんわ はぎとった ひわだいろの きものを  
わきに かかえて またたく まに きゅーな はしごを よるの そ  
こえ かけおいた。

しばらく しんだよーに たおれて いた ろーばが しがいの な  
かから その はだかの からだを おこしたのわ それから まもな  
くの ことである。 ろーばわ つぶやくよーな うめくよーな こ  
えを たてながら まだ もえて いる ひの ひかりを たよりに  
はしごの くちまで はって いった。 そーして そこから みじか

い しらがを さかさまに して もんの したを のぞきこんだ。  
そとにわ ただ こく とーとーたる よるが あるばかりで ある。  
げにんの ゆくえわ だれも しらない。

資料3 読売新聞の「にきび」の種別

種類のところには、本文で出てきた「にきび」の字体が表されている。

	掲載日	見出し	種類
1	1907.11.13	女の化粧術 日本橋の荘司高等調髪館夫婦が 西洋式的美顔術、ほかにも多彩／東京	ニキビ
2	1910.05.27	へなぶり／樽拾選 其上にニキビ蕎麦かすこ きまぜて哀れぞ深しへなぶりの君	ニキビ
3	1911.12.07	[街の一角] 軟らかいベッドでぐっすり眠り たい▽脂ぎったにきび顔と揚げ物の油	ニキビ
4	1914.03.19	今様／痴囊（真木幹之助）選	ニキビ
5	1915.05.13	[婦人付録] 梅檀の薬効 ニキビ腫物の妙薬	ニキビ
6	1918.03.09	[婦人付録] 消息 外相夫人の微恙▽河井醉 茗氏令嬢逝く▽濟生堂の美身法	ニキビ
7	1922.04.28	家庭衛生顧問 近視眼の予防／岡田道一	ニキビ
8	1923.05.22	美容流行顧問 毛の生えない法▽二重瞼とニ キビ▽フマグソン販売所／三須裕	ニキビ
9	1923.05.26	美容流行顧問 薄毛で困る▽髪を赤く染める には ほか／三須裕	ニキビ
10	1923.06.07	美容流行顧問 けがではげた頭▽顔面白せん か？▽ニキビのあと ほか／三須裕	ニキビ
11	1923.06.15	美容流行顧問 色黒とニキビの療法▽隆鼻器 の効能▽油顔の治療法 ほか／三須裕	ニキビ
12	1923.07.18	美容流行顧問／三須裕	ニキビ
13	1924.06.09	美粧顧問 藤波芙蓉	ニキビ

14	1924.07.20	美粧問答 三年前からのニキビ／藤波芙蓉	ニキビ
15	1924.09.19	美粧問答／藤波芙蓉	ニキビ
16	1925.02.09	美粧問答／藤波芙蓉	ニキビ
17	1925.04.13	[美容顧問]／久米仲子	ニキビ
18	1925.04.16	美容顧問／久米仲子	ニキビ
19	1925.04.19	[日曜付録] 春先に顔の汚れで出来るニキビ 吹出物は／国分寿郎氏（談）	ニキビ
20	1925.05.23	美容問答／久米仲子	ニキビ
21	1925.07.13	美容問答／久米仲子	ニキビ
22	1925.07.14	皮膚科顧問／医学博士・埴繁弥太	ニキビ
23	1925.08.02	美容問答／久米仲子	ニキビ
24	1925.11.25	皮膚科顧問／医学博士・埴繁弥太	ニキビ
25	1926.08.14	家庭科学 吹出もの	ニキビ
26	1888.03.18	医学博士処方の白粉下「花の雲」を製造販売 ／東京	にきび
27	1891.07.31	アセモ、ニキビに効く水白粉「花のゆき」発 売／東京・神田	にきび
28	1903.10.27	にきびの療法	にきび
29	1908.01.31	[肥える法、痩せる法] その2 = 16 痩せ る薬／田村化三郎談	にきび
30	1907.02.25	美顔術の昨今 施術者の庄司直子は来月から 発毛術を行う由	面皰

資料4 『羅生門』読点の位置と分類について

これらの読点は、本文に出てきた順番にリスト化されている。

	本文	番号
1	一人の下人が、	13
2	広い門の下には、	16
3	唯、	18
4	所々丹塗の剥げた、	20
5	大きな円柱に、	16
6	羅生門が、	13
7	朱雀大路にある以上は、	13
8	この男の外にも、	24
9	雨やみをする市女笠や揉烏帽子が、	13
10	それが、	13
11	何故かと云うと、	23
12	この二三年、	16
13	京都には、	16
14	旧記によると、	23
15	仏像や仏具を打碎いて、	23
16	その丹がついたり、	24
17	金銀の箔がついたりした木を、	99
18	道ばたにつみ重ねて、	23
19	洛中がその始末であるから、	23
20	羅生門の修理などは、	13

21	するとその荒れ果てたのをよい事にして、	23
22	とうとうしまいには、	13
23	引取り手のない死人を、	99
24	この門へ持って来て、	23
25	そこで、	17
26	日の目が見えなくなると、	14
27	誰でも気味を悪がって、	23
28	その代りまた鴉が何処からか、	99
29	昼間見ると、	14
30	その鴉が、	13
31	何羽となく輪を描いて、	23
32	高い鷗尾のまわりを啼きながら、	23
33	殊に門の上の空が、	13
34	夕焼けであかくなる時には、	16
35	それが胡麻をまいたように、	18
36	鴉は、	13
37	勿論、	18
38	門の上にある死人の肉を、	99
39	尤も今日は、	13
40	刻限が遅いせい、	15
41	唯、	18
42	所々、	18
43	崩れかかった、	20
44	そうしてその崩れ目に長い草のはえた石段の上に、	16

45	鴉の糞が、	13
46	下人は七段ある石段の一番上の段に、	16
47	洗いざらした紺の襖の尻を据えて、	23
48	右の頬に出来た、	20
49	大きな面砲を気にしながら、	23
50	ぼんやり、	18
51	作者はさっき、	18
52	しかし、	17
53	下人は雨がやんでも、	23
54	ふだんなら、	23
55	勿論、	18
56	所がその主人からは、	13
57	前にも書いたように、	15
58	今この下人が、	13
59	永年、	16
60	使われていた主人から、	99
61	暇を出されたのも、	99
62	「雨にふりこめられた下人が、	13
63	行き所がなくて、	23
64	途方にくれていた」と云う方が、	13
65	その上、	18
66	今日の空模様も少なからず、	99
67	申の刻下りからふり出した雨は、	13
68	そこで、	17

69	下人は、	13
70	云わばどうにもならない事を、	99
71	どうにかしようとして、	23
72	とりとめもない考えをたどりながら、	23
73	さっきから朱雀大路にふる雨の音を、	99
74	雨は、	13
75	羅生門をつつんで、	23
76	遠くから、	99
77	夕闇は次第に空を低くして、	23
78	見上げると、	23
79	門の屋根が、	13
80	斜につき出した葺の先に、	16
81	どうにもならない事を、	99
82	どうにかする為には、	13
83	選んでいれば、	14
84	築土の下か、	24
85	道ばたの上で、	16
86	そうして、	17
87	この門の上へ持って来て、	23
88	下人の考えは、	13
89	何度も同じ道を低徊した揚句に、	99
90	しかしこの「すれば」は、	13
91	何時までたっても、	23
92	下人は、	13

93	手段を選ばないという事を肯定しながらも、	23
94	この「すれば」のかたをつける為に、	18
95	当然、	18
96	その後に来る可き「盗人になるより外に仕方がない」と云 う事を、	99
97	積極的に肯定する丈の、	99
98	下人は、	13
99	大きな嚏をして、	23
100	それから、	17
101	夕冷えのする京都は、	13
102	風は門の柱と柱の間を	99
103	夕闇と共に遠慮なく、	99
104	丹塗の柱にとまっている蟋蟀も、	13
105	下人は、	13
106	頸をちぢめながら、	23
107	山吹の汗衫に重ねた、	20
108	紺の襖の肩を高くして、	23
109	雨風の患のない、	20
110	人目にかかる惧のない、	20
111	一晩楽にねられそうな所があれば、	14
112	そこでともかくも、	18
113	すると、	17
114	幸門の上の楼へ上る、	20
115	幅の広い、	20

116	上なら、	14
117	人がいたとしても、	99
118	下人はそこで、	17
119	腰にさげた聖柄の太刀が鞘走らないように気を付けながら、	23
120	藁草履をはいた足を、	99
121	それから、	16
122	羅生門の楼の上へ出る、	20
123	幅の広い梯子の中段に、	16
124	一人の男が、	13
125	猫のように身をちぢめて、	23
126	息を殺しながら、	23
127	楼の上からさす火の光が、	13
128	かすかに、	18
129	短い鬚の中に、	16
130	下人は、	13
131	始めから、	18
132	この上にいる者は、	13
133	それが、	17
134	梯子を二三段上って見ると、	23
135	上ではだれか火をとぼして、	23
136	しかもその火を其処此処と、	99
137	これは、	13
138	その濁った、	20

139	黄色い光が、	13
140	隅々に蜘蛛の巣をかけた天井裏に、	16
141	揺れながら映ったので、	23
142	この雨の夜に、	16
143	この羅生門の上で、	16
144	火をともしているからは、	13
145	下人は、	13
146	守宮のように足音をぬすんで、	23
147	やっと急な梯子を、	99
148	そうして体を出来る丈、	99
149	平らにしなから、	23
150	頸を出来る丈、	99
151	前へ出して、	23
152	恐る恐る、	18
153	見ると、	23
154	楼の内には、	16
155	噂に聞いた通り、	15
156	幾つかの屍骸が、	13
157	無造作に棄ててあるが、	23
158	火の光の及ぶ範囲が、	13
159	思ったより狭いので、	23
160	唯、	18
161	おぼろげながら、	23
162	知れるのは、	13

163	その中に裸の屍骸と、	24
164	勿論、	18
165	そうして、	17
166	その屍骸は皆、	18
167	それが、	13
168	嘗、	18
169	生きていた人間だと云う事実さえ疑われる程、	18
170	土を捏ねて造った人形のように、	18
171	口を開いたり手を延ばしたりして、	23
172	しかも、	17
173	肩とか胸とかの高くなっている部分に、	16
174	ぼんやりした火の光を受けて、	23
175	低くなっている部分の影を一層暗くしながら、	23
176	下人は、	13
177	それらの屍骸の腐爛した臭気に思わず、	99
178	しかし、	17
179	その手は、	13
180	次の瞬間には、	16
181	ある強い感情が、	13
182	下人の眼は、	13
183	その時、	16
184	はじめて、	18
185	檜皮色の着物を着た、	20
186	背の低い、	20

187	瘦せた、	20
188	白髪頭の、	20
189	その老婆は、	13
190	右の手に火をともした松の木片を持って、	23
191	髪の毛の長い所を見ると、	99
192	下人は、	13
193	六分の恐怖と四分の好奇心とに動かされて、	23
194	旧記の記者の語を借りれば、	23
195	すると、	17
196	老婆は、	13
197	松の木片を、	99
198	床板の間に挿して、	23
199	それから、	17
200	今まで眺めていた屍骸の首の両手をかけると、	23
201	丁度、	18
202	猿の親が猿の子の虱をとるように、	18
203	その髪の毛が、	13
204	一本ずつ抜けるのに従って、	23
205	下人の心からは、	13
206	そうして、	17
207	それと同時に、	18
208	この老婆に対する激しい憎悪が、	13
209	いや、	19
210	この老婆に対すると云っては、	13

211	寧、	18
212	あらゆる悪に対する反感が、	13
213	この時、	18
214	誰かがこの下人に、	99
215	さっき門の下でこの男が考えていた、	20
216	餓死をするかするか盗人になるかと云う問題を、	99
217	改めて持出したら、	23
218	恐らく下人は、	13
219	何の未練もなく、	99
220	それほど、	17
221	この男の悪を憎む心は、	13
222	老婆の床に挿した松の木片のように、	18
223	下人には、	13
224	勿論、	18
225	従って、	17
226	合理的には、	13
227	しかし下人にとっては、	13
228	この雨の夜に、	16
229	この羅生門の上で、	16
230	死人の髪の毛を抜くと云うことが、	13
231	勿論、	18
232	下人は、	13
233	さっき迄、	18
234	自分が、	13

235	盗人になる気でいた事などは、	13
236	そこで、	17
237	下人は、	13
238	両足に力を入れて、	23
239	いきなり、	18
240	そうして聖柄の太刀に手をかけながら、	23
241	老婆は、	13
242	一目下人を見ると、	23
243	まるで弩にでも弾かれたように、	99
244	「おのれ、	19
245	下人は、	13
246	老婆が屍骸につまづきながら、	23
247	慌てふためいて逃げようとする行手を塞いで、	23
248	老婆は、	13
249	下人は又、	17
250	それを行かすまいとして、	23
251	二人は屍骸の中で、	16
252	暫、	18
253	無言のまま、	18
254	しかし勝敗は、	13
255	はじめから、	27
256	下人はとうとう、	18
257	老婆の腕をつかんで、	23
258	丁度、	18

259	鶏の脚のような、	18
260	云わぬと、	14
261	下人は、	13
262	老婆をつき放すと、	23
263	いきなり、	18
264	太刀の鞘を払って、	23
265	白い鋼の色を、	99
266	けれども、	17
267	両手をわなわなふるわせて、	23
268	肩で息を切りながら、	23
269	眼を、	99
270	眼球が眶の外へ出そうになる程、	18
271	見開いて、	23
272	これを見ると、	23
273	下人は始めて明白に、	18
274	この老婆の生死が、	13
275	全然、	18
276	そうしてこの意識は、	13
277	今までけわしく燃えていた憎悪の心を、	99
278	後に残ったのは、	13
279	唯、	18
280	或仕事をして、	23
281	それが円満に成就した時の、	99
282	そこで、	17

283	下人は、	13
284	老婆を、	99
285	見下ろしながら、	23
286	だからお前に縄をかけて、	23
287	唯、	18
288	今時分、	17
289	この門の上で、	16
290	何をして居たのだか、	99
291	すると、	17
292	老婆は、	13
293	見開いていた眼を、	99
294	一層大きくして、	23
295	眶の赤くなった、	20
296	肉食鳥のような、	20
297	それから、	17
298	皺で、	18
299	殆、	18
300	鼻と一つになった唇を、	99
301	何か物でも噛んでいるように、	18
302	細い喉で、	20
303	その時、	16
304	その喉から、	99
305	鴉の啼くような声が、	13
306	喘ぎ喘ぎ、	18

307	「この髪を抜いてな、	26
308	この髪を抜いてな、	26
309	下人は、	13
310	老婆の答が存外、	18
311	そうして失望すると同時に、	16
312	又前の憎悪が、	13
313	冷な侮蔑と一しよに、	18
314	すると、	17
315	その気色が、	13
316	老婆は、	13
317	片手に、	99
318	まだ屍骸の頭から奪った長い抜け毛を持ったなり、	23
319	墓のつぶやくような声で、	99
320	口ごもりながら、	23
321	「成程な、	19
322	死人の髪のを抜くと云う事は、	13
323	じゃが、	17
324	ここにいる死人どもは、	13
325	皆、	18
326	その位な事を、	99
327	現に、	18
328	わしが今、	18
329	髪を抜いた女などはな、	13
330	蛇を四寸ばかりずつに切って干したのを、	99

331	干魚だと云うて、	23
332	疫病にかかって死ななんたら、	23
333	それもよ、	19
334	この女の売る干魚は、	13
335	味がよいと云うて、	23
336	太刀帯どもが、	13
337	わしは、	13
338	せねば、	23
339	餓死をするのじゃて、	23
340	されば、	23
341	今又、	17
342	これとてもやはりせねば、	23
343	餓死をするじゃて、	23
344	じゃて、	23
345	その仕方がない事を、	99
346	よく知っていたこの女は、	13
347	老婆は、	13
348	下人は、	13
349	太刀を鞘におさめて、	23
350	その太刀の柄を左の手でおさえながら、	23
351	冷然として、	23
352	勿論、	18
353	右の手では、	99
354	赤く頬に膿を持った大きな面炮を気にしながら、	23

355	しかし、	17
356	之を聞いている中に、	23
357	下人の心には、	13
358	それは、	13
359	さっき門の下で、	16
360	そうして、	17
361	又さっきこの門の上へ上って、	23
362	この老婆を捕えた時の勇気とは、	18
363	全然、	18
364	下人は、	13
365	餓死をするか盗人になるかに、	99
366	その時の、	16
367	この男の心もちから云えば、	23
368	餓死などと云う事は、	13
369	殆、	18
370	考えることさえ出来ない程、	18
371	「きっと、	18
372	老婆の話が完ると、	23
373	そうして、	17
374	一足前へ出ると、	23
375	不意に右の手を面砲から離して、	23
376	老婆の襟上をつかみながら	23
377	「では、	17
378	己もそうしなければ、	14

379	下人は、	13
380	すばやく	18
381	それから、	17
382	足にしがみつこうとする老婆を、	99
383	梯子の口までは、	13
384	下人は、	13
385	剥ぎとった檜皮色の着物をわきにかかえて、	23
386	暫、	18
387	死んだように倒れていた老婆が、	13
388	屍骸の中から、	16
389	その裸の体を起したのは、	13
390	老婆は、	13
391	つぶやくような、	18
392	うめくような声を立てながら、	23
393	まだ燃えている火の光をたよりに、	99
394	梯子の口まで、	99
395	そうして、	17
396	そこから、	16
397	短い白髪を倒にして、	23
398	外には、	16
399	唯、	18
400	下人の行方は、	13

参考文献等

(1) 厚生労働省社会・援護局障害保健福祉部企画『平成 18 年身体障害児・者実態調査結果』

<https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/shintai/06/> (最終アクセス 2018 年 12 月 16 日)

(2)水谷昌史「ルポ これが良いのか？点字図書館 改革提案—利用者の立場から」『視覚障害』196号 p8-17 2004年9月

(3)田中徹二「学術図書の視覚障害者サービス」『情報の科学と技術』50巻3号 p132-136 2000年

(4)渡辺哲也・小林真・南谷和範「視覚障害者のための点訳・音訳サービス利用状況調査」『ヒューマンインタフェース学会論文誌』20巻1号 p13-20 2018年

(5)朝日新聞社『学問がわかる500冊』朝日出版社 2000年3月

(6)サピエ 視覚障害者情報総合ネットワーク「詳細検索」  
<https://www.sapie.or.jp/cgi-bin/CN1WWW> (最終アクセス 2018年8月29日)

(7)栃木市図書館 OPAC「詳細検索」  
<http://opac.library.tochigi.tochigi.jp/OPP0200> (最終アクセス 2018年8月29日)

(8)全国視覚障害者情報提供施設協会『点訳のてびき 第3版』全国視覚障害者情報提供施設協会 2011年10月

(9)あべ・やすし「漢字という権威」『社会言語学』4号 p43-56 2004年

(10)あべ・やすし「漢字という障害」『社会言語学』2号 p37-55 2002年

- (11) ましこ・ひでのり「カンジ の ギャク・キノー ーかきことば の  
シャカイガク (1)」『和光大学人文学部紀要』28号 p61-73 1993  
年  
ましこ・ひでのり「『カンジ・フカケツ ロン』の しくみ ーか  
きことば の シャカイガク (2)」『和光大学人文学部紀要』29号  
p201-214 1994年  
ましこ・ひでのり「かきことば・お サベツ・の シュダン・に し  
ない ため・にーかきことば の シャカイガク (3)」『解放社会  
学研究』8号 p49-76 1994年
- (12) 朝日新聞社『朝日新聞社記事データベース 聞蔵IIビジュアル』  
<http://database.asahi.com/index.shtml> (最終アクセス 2018年12  
月16日)
- (13) 朝日新聞「実用問答(答の部)」1898年10月19日東京朝刊 3頁  
2段
- (14) 朝日新聞「顔面の清潔」1901年2月2日東京朝刊 2頁6段
- (15) 読売新聞社『ヨミダス歴史館』  
<https://database-yomiuri-co-jp.ez.wul.waseda.ac.jp/rekishikan/>  
(最終アクセス 2018年12月16日)
- (16) 大類雅敏『そこに句読点を打て!』栄光出版社 1976年5月第一  
刷発行
- (17) 工藤浩ほか『改訂版 日本語要説』p235 ひつじ書房 2009年6  
月
- (18) 17と同じ
- (19) 16と同じ p90
- ①32字×25行=800字②800字×45ページ(資料を除く)=36,000字